
IS インフィニット・ストラトス ~ 蒼空を駆ける者達 ~

イサム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 蒼空を駆ける者達

【Nコード】

N3873R

【作者名】

イサム

【あらすじ】

世界で初めてISを起動した男、織斑一夏。しかし、実は5年前にISを起動した男がいた。その男の名前は、日暮イサム。篠ノ乃束と共にISの開発をした日暮博士夫妻の一人息子である。両親の死後、IS操縦者兼研究技術者として束と共に行動していたが、一夏の登場により状況が一変する。

「ゆーくん、明日からIS学園に通ってもらうからね。手続きは済んでるから。」「はい?」

親友との再会、学園生活を通してできる仲間、そして恋、今イサム

の物語が幕を開ける！

出発前のこと（前書き）

初めまして。文才無いですが、よろしくお願いします。

出発前のこと

「ゆーくん、明日からIS学園に通ってもらうからね。手続きは済んでるから。」「・・・はい?」

いつも通りラボに来たら開口一番に東さんにそう言われた。いきなり何事?言っている意味は理解できるが・・・

「IS学園ですか?何でそんな急に?こう言っただけなんです、教わるような事は何も無いと思うのですが?」

ISについての知識は現段階で判明していることはすべて頭に叩き込んでいるし、搭乗時間においては13000時間を越している。

この搭乗時間は各国の国家代表の約2倍にあたる。何しろ、初めてISを起動してから5年間ほぼ毎日束さんの作った新兵器の実験やらIS研究やらに費やしてきたのだ、当然と言えば当然である。

それに僕は人間の常識から外れてしまった存在だしね・・・

「それはそうなんだけどね。入った時のメリットを考えるとやっぱり入ったほうが良いと思っただけ。」

「メリットですか?」

「あそこってさ、生徒の許可無く外的介入することを禁止するみたいな特記事項があるんだよね。だから3年間はこの研究者達も手出し出来ない。その3年の間にゆーくんほどの腕だったら何処かの国から専属操縦者の申し出が来る筈だから、それを受理すれば学園を卒業した後も外的介入は受けない。隠遁生活よさらば!!ということになるのだよ。」

「確かに・・・そうですね。でも、なぜ今頃?もっと早い段階で入学出来たのではないのでしょうか?」

「いままでは男のIS操縦者の入学なんて前例は無かったから、入学許可をもらえない可能性があったんだけどね。」

「・・・成る程、一夏ですか」

思い至ったのは親友の名前。最近、男なのにISを起動したと世間

を騒がせていた。一夏はその希少性からIS学園に強制的に入学させられたのだ。

一夏をIS学園に行かせたのに僕を行かせないわけが無い。

「うんうん。ゆーくんは理解が早くて助かるよ。という訳だから早速日本に向かってね！」

「わかりました。では荷物をまとめてきますので、僕は失礼します。」

「
そう言い残し荷物を纏める為に僕は足早に自分の部屋へと向かった。

バシユン

ドアの閉まる音。イサムが出て行きラボには束一人だ。

「ふっふっふ、ゆーくんは荷物の準備に行っちゃたし、束さんも作戦準備に取り掛かるとしよう。名づけて、ゆーくんを有名人にしちゃえ大作戦！だね。ちようど国連の会議が報道されるし、それをジャックしてゆーくんの存在を社会に教えてあげるとしよう。ふ、ふ、ふふっ」

ブルツ

部屋で荷物を纏めていたら、急に背筋に悪寒が走った。

「な、何か嫌な予感がするな。」

その嫌な予感が現実にならないことを祈りながら、僕は作業を続けた。

出発前のこと（後書き）

次回はイサムが日本に到着したところからです。

日本到着、到着前千冬SIDE（前書き）

今回はイサムが日本に降り立ったところからです。
今回から〇〇SIDEという書き方にします。

日本到着、到着前千冬SIDE

イサムSIDE

「到着つと。確か教師の方が迎えに来てくれる手筈だったよね？アリス。」

と僕は左手に付けている白いプレスレットに問いかける。端から見れば変人に見えるだろう行為、しかし僕にとっては至って日常的な行為だ。何故なら

「はい、束様がくださったスケジュールではそのようになっておりますよ、マスター」

プレスレットはちゃんと返事をしてくれるからだ。何を隠そう、このプレスレットが僕のISだ。死んだ両親が僕に残したIS。このISが他のISと大きく異なっているところは自我を持っていて、尚且つ会話ができるところだ。普通のISは会話など出来ない、自我については最近興味深い話が出てきていて一概に無いとはいえないのだが・・・一般的には無いと言われている。どうしてアリスが喋れるのかはわかっていない。ちなみにアリスは女性だ。

「教師の方の写真とかはもらってないの？」

「それが・・・送られてきていないのです。」

「それは困ったなあ・・・顔が解らなきゃ探しようが無い。僕にどうしろと・・・」

「教師のかたにはマスターの写真をお送りしたそうですので、向こうが見つけてくれるのを待つしかないかと。」

「そっか、じゃあもう少し広いところに出たほうが良いね。中央ロビーとか。」

「そうですね。それが良いかと。」

「よし、じゃあ行こう！」

そう言つて、僕は中央ロビーの方向へと歩き出した。しばらく歩いていると前方におおきなディスプレイが見えてきた。ディスプレイ

の中では頭の固そうなオジサンやオバサン達が何やら激しく言い争っていた。

（そういえば、国連会議の最中だったっけ？）

そんなことを思っていたら急に画面にノイズが走った。

「何だ！？」

まわりの人たちも、何だ？、何が起きてるの？、テ、テロか？と騒ぎ始めた。全員が緊張した面持ちで画面を見つめている。すると突然、画面にウサミミを付けたアニメのキャラの絵が現れた。そして・

「はい、世界の皆さん私はISを作ったエツラーイ科学者、束さんだよ」

ガクッ

ずっこけてしまった・・・何故なら聞こえてきたのは紛れもなく束さんの声だったからだ。

「ナ、ナニヲヤツテルンダアノヒトハ・・・」

「束様の行動はいつも突発的且つ大胆ですね・・・」

僕が驚いている間にも放送は続いている。

「今日は世界の皆に重大なお知らせがありまーす！つい最近、ISを使える男の子が現れた！というニュースが報道されたよね。でも実は、もう一人いるんだよー！その子の名前は日暮イサムくん！あ！これが写真ね。カッコイイでしょー？、イケメンでしょー？捕って食べちゃいたいでしょー？でも、ダメだよー！ゆうくんはこの束さんの物だからねー！まあ、ちーちゃんだったら譲ってあげないこともないけどね、それ以外はダメ。ゆうくんもIS学園に通うことになってね、今頃空港に居るはずだよん。探してみてね。では以上、天才の束さんでした！バイバーイ！！」

話したいことは全て話したらしい、ウサミミが消えてさっきのオジサン、オバサンたちが画面にうつされた。辺りは勿論、画面の中のオジサン、オバサンたちも突然の告知に驚き口が開けられないよう

だ。

「・・・・・・・・・・あ、頭イタイ・・・」

「あわわ、大丈夫ですかマスター？」

そんな問答をしていると不意に此方を見ていた女性2人組が

「ねえ、あの子・・・さっきの写真の子じゃない？」

「え？ウソだ・・・確かにさっきの写真の子ね・・・」

その2人組の会話を機に、そうよさっきの子よ！、キヤーほんとに
カッコイイ！！、お持ち帰りいいいい！！、あらゝわたしの好み
だわゝ男同士仲良くしない？

な、なんか最後変なの混じってたような・・・と、とりあえず・

・

「に、逃げろおおおおおおお！！！！！！！！」

僕は叫びながら全力疾走を開始した！！

「キヤーーーーー待ってーーーー！！！！！！」

後ろから修羅と化した女性達？が追いかけてくる。

「こ、こないでくださいーーーーい！！！！！！」

な、何で僕がこんな目に・・・・

千冬SIDE

その知らせが悪友からきたのは昨日のことだった。悪友・・・も
とい束が言うには、ISを使う男がもう一人居るらしい。そいつ
は今まで束と共にISの武器開発や研究に携わっていたらしいのだ
が、一夏の件に乗じてIS学園に入学させたいらしい。

「どんなやつなんだろうか・・・」

入学させるのには反対はしないが、何しろ入学生がデータが送られ
てこない。データが無ければどのような人物なのか解らないのでク
ラスが決められないのだ。根性無さそうな顔だったら私のクラス、
真面目そうであれば何処でも構わない。クラス訳も意外と考えるこ

とが多いのだ。とりあえず今は束からのデータ待ちだ。

「ふう」

ため息をつき、天井を見上げたところであることに気づいた。

「ああ、また触っている」

私にはある癖がある。何か考え事をしているときや嫌な事があった時に無意識に左手にある黒いブレスレットを触ってしまうのだ。それはある男の子にプレゼントされたものだ。

「あの子は元気なのだろうか・・・」

ある日、突然私の前から姿を消したあの子・・・

いくら探しても、あの子の消息は掴めなかった・・・まるで最初から居なかったかのように・・・

弟を守るため、世界を守るためにと力をふるい続けて誰かを守ることしか知らず守られることを知らなかった私に

「ちーねえがみんなをまもっているみたいに、ぼくがちーねえをまもってあげる」

とまだ幼いのに確かな決意をその金色に光り輝く瞳に宿し言ってくれたあの子・・・

その言葉は私の胸の奥深くに刻み込まれた。それ以来、わたしは人を頼ることをおぼえた。と同時に人に甘えることも・・・まあ他人から見れば、ぜんぜん甘えているようには見えないみたいだが。あの一件であの子はわたしにとって大切な一生忘れられない存在になった。

「今、何処に居るんだ？・・・逢いたい・・・・・・イサム・・・」

ピロリロリン

突然メールの着信音が鳴り、わたしは思考の渦から引き戻された。メールの送信者は束、待っていたデータがようやくきたようだ。

送られてきたメールを開いたところで、わたしの周りの世界の時間が止まった。

原因はそのメールの内容

名前 日暮イサム
年齢 17
専用IS 有
専用IS名 ALICE
IS搭乗時間 15121時間
戦闘スタイル 全距離対応型

上記の者のIS学園への入学を推薦する。

「イサム……」

添付されていた写真を見るために震える手でマウスを動かしファイルを開く……

そこには、5年まえと全く変わらない優しい微笑みを浮かべ、金色に光輝く目で此方を見ている、千冬がずっと探していた日暮イサムの写真があった。

「あの子だ……」

感慨に浸ってはいられない。急いで学園長に電話を掛ける。

「学園長、例の入学を希望している男子なのですが、わたしのクラスに編入させようと思います。纏めたほうが何かとやりやすいかと・

・はい、ええ。迎えにも私自ら行きますので、他の先生方にもそうお伝えください、では」

「やっと見つけた……イサム」

一筋の涙が私の頬を伝っていた。

日本到着、到着前千冬SIDE（後書き）

どうでしたか？若干というかなん千冬がキャラ崩壊していますが、ご容赦ください。次は恐らく火曜日になるかと

主人公設定、IS設定（前書き）

今回は主人公設定とIS設定のご紹介になります。
これまでの2話で疑問に思ったこともこれを読めば納得いただける
と思います。

主人公設定、IS設定

主人公

名前 日暮イサム

年齢 17

専用IS ALICE

本作の主人公。世界で始めてISを起動した男。篠ノ乃東と共にISを開発した日暮博士夫妻の一人息子。最強のIS操縦者になる為に両親から強化を施されている。実験の内容は脳に特定の微弱電流を流し、身体能力や記憶力を強制的に強化するというものだった。

その実験は見事に成功し、普通では考えられない身体能力と完全記憶能力を有している。その一方で脳に電流を流し続けた結果、本来眠っている筈の脳の機能が覚醒してしまっている。瞳が常に金色に光り輝いているのはその為である。更には、第6感

の異様なまでの発達（危機感知能力の発達）、思考盗撮及び思考伝達などができるようになっていく。

一夏とは自由時間に外出していた際、偶然知り合い仲良くなった。（ちなみに学校には通っていないかった。）その後、一夏の紹介により千冬と出遭う。その際、千冬の心の奥底に眠っていた感情を思考盗撮により知ってしまった彼女を守りたいと考えるようになり、千冬とある約束をする。

しかし突然、両親が事故死したという知らせが入り、状況が一変。遺品整理をしていた研究室で隠し部屋を偶然発見。隠し部屋の中に保管されていたアリスの起動に成功してしまう。その事実を知り、イサムが実験対象にされることを恐れた束の再三の説得に応じ、千

モルモット

冬との約束を守りたいという思いと千冬と一夏に迷惑をかけたくないという葛藤に決着をつけ、世界から身を隠すことにした。

その後5年間という長い時間をISの研究に費やしてきたが、一夏の登場により状況が一変しIS学園に入学することになる。その際、存在を秘匿されていた為にIS初心者であると思われ、1年生として編入させられることになった。

IS設定

IS名 A L I C E

イサムの専用IS。待機状態は白のブレスレット。

束の作ったコアで出来たISが女性にしか反応しないということが判明した為に、日暮博士夫妻が自分たちでコアを開発し作ったIS。原因不明だが開発途中に自我を持つようになり、それを知った博士夫妻により会話能力を付与された。成人とほぼ変わらない会話能力を持っており、知識も高い。A L I C Eは博士夫妻の「私たちのISが最強」という理念のもとに作られた為に最初から対IS戦を念頭に置かれており、他のISを大きく凌駕する性能を有している。搭乗者登録というものがあり、イサムが登録されていて他の者には起動出来ないようになっている。

性能

唯一仕様の特殊仕様<ワン・オフ・アビリティ>

形態変化<スタイルチェンジ>

敵や状況に応じて形態を変化させることが出来る。形態変化後の姿

が形態変化前と大きく異なり、またそれぞれの形態が個々のワン・オフ。アビリティを有している為に、複数のISを所持しているのと同じようなものである。

基本形態 U N I C O R N

ARICEの基本形態。幾何学模様の継ぎ目が全身に走った純白の装甲と頭部の一本角が特徴の機体。中距離武装型。ARICEを起動した際はこの形態で装着される。

ワン・オフ・アビリティ ????

武器性能

ビーム・マグナム

UNICORNの主武装。1発の威力はセシリアのブルー・ティアーズの主武装であるスターライトmk?の4発ぶんの威力がある。スターライトmk?のビームを火線とするならば、ビーム・マグナムは火球。

その威力故に予めエネルギーを充填したエネルギーパックを使用するため弾数に制限がある。1カートリッジ5パックで、計4カートリッジを所持している。また、1パックで5発撃つことが出来る弱装モードがある。

ハイパー・バズーカ

拡散性能のあるバズーカで主に牽制として使われる。拡散範囲が広い為に敵の動きを止めたり、阻んだりすることに適している。拡散させない収束モードもある。背中に取り付けることができ、回避と同時に撃つなどトリッキーな使い方も出来る。

ビーム・ガトリング

ビーム弾を射出するガトリング。多対一の時に使用する。威力よりも質量を重視した武装で言わば、数撃ちや当たるを地で行く武装。

ビーム・サーベル

エネルギーを剣状に圧縮させて、斬ることを目的とした武装。左右の前腕部に1本ずつと背中に2本装備されている。背中の2本はバツクパックに畳まれており、特定条件下でしか使用出来ない。鉄製の厚さ1mのブロックを容易く両断出来るほど切れ味が良い。

まだまだ形態はあるのですが、それらは登場次第紹介させていただきます。

主人公設定、IS設定（後書き）

この設定を呼んでも疑問に残ることがありましたらお知らせください。明日か明後日にはお答えしたいと思います。

今日の更新はこれだけです。呼んでくださった方々、どうも、ありがとうございます！

再会と・・・（前書き）

今回はイサムと千冬の再会のお話です。

再会と・・・

千冬SIDE

私は今、空港に來ている。理由はもちろん、イサムの迎えだ。しかし、來たのは良いのだが少し・・・いや、かなり困っている。第一声を何にするかが未だに決まっていけないのだ。入学してくるのがイサムだと知ったのが昨日。それから今までの間、約14時間以上も考え続けているのだが、一向に良い言葉が思いつかない。勿論、一睡もしていない。気分が舞い上がっていて、一向に眠気が来なかったのだ。何とも乙女チックなものだ。どこのメルヘン少女の話だ？とは思うが、自分自身のことなのだからどうしようもない。

（ドイツでは鬼教官などと言われていた私が、この様だ・・・まったく、罪作りの男だよ、お前は・・・）

いやいや、こんなことを考えている場合では無い！早く決めなくては。

「うゝむ・・・元気だったか？・・・これでは、ありきたり過ぎる・・・」

「貴様！今まで何処をほつつき歩いていた！！・・・私は何処の鬼教官だ？大体、イサムにだって何か考えが在ったはずだ。いきなり責め口調でどうする・・・」

「しばらく見ない間にずいぶん大きくなったな・・・これなんか良いんじゃないだろうか・・・いや、遠まわしに責めているようにも聞こえる」

壁に寄りかかりながら独り言をブツブツと呟いている様は、端から見れば変人にしか見えないのだろう。前を通りかかった者が奇異の目で見てくるが、そんなことは気にしてはいられない。私にしてみれば死活問題なのだ。

どれくらい時間が経っただろうか？不意に悪友の声が耳に入った。
「はい、世界の皆さん、私はISを作ったエッラーイ科学者、束
さんだよ」

「束？」

突然のことに驚きながらも、わたしは声の発生源である大型のディスプレイに目を向けた。さっきまで、国連会議を放送していた画面にはウサミミを付けたアニメのキャラが映し出されていた。大方、放送電波をジャックでもしたのだろう。そんなことを考えていると、あのバカはとんでもないことを口にし始めた。

「今日は、世界の皆に重大なお知らせがありまーす！つい最近、ISを使える男の子が現れた！というニュースが報道されたよね。でも、実は、もう一人いるんだよー！その子の名前は日暮イサムくん！あ！これが写真ね。カッコイでしょー？、イケメンでしょー？捕って食べちゃいたいでしょー？でも、ダメだよー！ゆうくんはこの束さんの物だからねー！まあ、ちーちゃんだったら譲ってあげないこともないけどね、それ以外はダメ。ゆうくんもIS学園に通うことになってね、今頃空港に居るはずだよん。探してみてね。では以上、天才の束さんでした！バイバーイ！！」

話したいことは全て話したらしい、ウサミミが消えて国連会議の場に映像が戻った。

「あのバカは何を考えているんだ！！」

急に痛み出した頭を抑えながら、そう呟いた瞬間に周りがざわつき始めた。

（まさか！）

辺りを見渡し、その姿を探す。そして、見つけた。ずっと探し続けていた人物を・・・イサムの姿を。

突然のことに驚き、戸惑っているようだ。すると突然「に、逃げろおおおおおおおおお！！！！！！」

と叫びながら、出入り口に向かい走り出した。

「キヤーーーーー！ 待ってーーーー！！！！！！！！」

などと叫びながら追いかけていく。あまりに突然すぎて事態についていけない・・・が、

「う、こないでさー……い……!」

というイサムの必死の叫びを聞いた瞬間、私は体をバンクさせて走り始めた。

「あのクソバカマッドサイエンティストめ、今度会ったら一発殴る
！！！」

イサム
SIDE

[illegible]

僕は必死の思いで走っていた。身体強化を受けている為、追いつかれることは無いだろうが何しろ追ってくる人たちの顔が怖い。まるで何かに取り憑かれているようだ。

（東さんが余計なことするから！今度会ったらお仕置きしないと）
などと考えながら走っていると、不意に後ろから声を掛けられた。

「イサム！！」

（あれ？この声って・・・）

掛けられた声には聞き覚えがあつた。かつて、約束を交わしたあの
人だ。まさか！と思ひながら後ろを振り返ると、そこには想像した
とおりの人が居た。

「ちーねえ！」

織斑千冬、その人が僕を追走するように走っていた。

「久しぶりだね、ちーねえ。どうして此処に？」

「お前の迎えだ！」

「ということは、ちーねえがISS学園の教師？」

「そうだ！話は後だ！とりあえず此処から出るぞ！車を持ってきてる、其処まで走れるか？」

「当然！」

周りの目を惹きつける凜々しい顔立ち、凜とした声。久しぶりに会うが、何処も変わってない。それが嬉しくて、勝手に笑みがこぼれてしまった。

「乗れ！」

ちーねえに言われた通りに車に乗り込む。

「ちーねえ、車の免許取ったんだ」

「ああ、つい最近な」

そう言いながら、ちーねえはアクセルを踏み車を出す。

「ふう、助かったー。ちーねえ、ありがとう」

息も絶え絶えにちーねえにお礼を言う。

「い、いや、気にするな／＼」

照れてるのかな？顔が赤くなってる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気、気まずい・・・

『あ、あの！』

うわー、声はもっちゃた・・・

「ち、ちーねえからで良いよ！」

「い、いや、イサムの方からで良いぞ」

何というベタな展開……。でも、僕には謝らなければいけないことがある。マンガとかだったらさっきのような問答を2、3回繰り返すのだろうが、そんなことはしてられない。

「そ、その・・・ちーねえ・・・勝手に居なくなっ、ごめんね・・・約束守れなくて、ごめんね・・・」

「そ、その・・・ちーねえ・・・勝手に居なくなつて、ごめんね・・・約束守れなくて、ごめんね・・・」

その言葉を聴いた瞬間、今までの怒りが全て何処かに消えた。私は正直に言えばイサムに怒りを覚えていた。なぜ、姿を消した？

あの約束はどうなったんだ？　なぜ、相談してくれなかった

？　お前にとって私という存在はその程度のもだったのか？と・

・

でも、イサムの悔しさの滲んだ本当に申し訳なさそうな声を聞いた瞬間、全てを呆気なく許すことができた。そして思った。

（ああ、私はこんなにもイサムのことが好きなのだ）

「別に良いさ。何か理由があつたんだろう？それならば仕方無いさ」
「え？」

責められることを覚悟していたのだろう、驚きに満ちた目で私を凝視している。

「お前なりに考えた結果なんだろう？私や一夏の為に」

「う、うん。あの・・・」

「いい」

「え？」

恐らく理由を言おうとしたのだろう。私はそれをさえぎった。

「言わなくて良い。イサムが私や一夏のことを考えての行動だったということとはわかったから、言わなくて良い」

「う、うん」

「これから、失った時間を取り戻していけば良い。そうだろうか？」

そう言い、ミラー越しにイサムに微笑む。

「そ、そうだよ・・・うん。きっとそうだよ。ありがとう、ちーねえ」

そう言った上げた顔には、今までの申し訳なさそうな顔では無く、私の好きな笑顔が浮かんでいた。

イサムSIDE

「着いたぞ、此处がIS学園だ」

そう言つて、ちーねえが車を停めた。辺りはすっかり暗くなってしまっている。途中で渋滞にはまったりして時間くっちゃたからな。それにしても

「大きいね。ほんとに学校？」

「ISについて学ぶ学校だからな。当然実習もあるから、此れ位の広さが無ければダメなんだよ」

「確かにね、それにしても大きいな」

「おい、ボーッと突っ立てないで中に入るぞ。今日はもう遅いから、学校の案内は明日の放課後にでもしてやろう」

そう言つてちーねえは足早に歩き始めた。いつも思うんだけど、ちーねえって歩くの早くない？離されないようにしなきゃ。

「ちよつと、待つてよ！早すぎだつて！」

やつと追いついたよ。

「ねえ、何処に向かつてるの？」

「私たちの部屋だ」

「そつか、部屋か……つて、え？私たち？」

なんか、問題発言がサラつとでてきたような気がしますか？

「そうだ。急なことだったので空いている部屋が無くてな。仕方無いから、イサムは私の部屋で生活して貰う」

にやけた顔をしながら、こんなことを言ってきましたよ？

「えつと、それは色々と問題があると思いますよ？こつ、世間的に」

「い、嫌なのか？」

なんか凄くいじけたような声で聞かれた。

「いや、別に嫌とかじゃなくて、ほかの先生方の目とかがさ・・・」
「それなら問題無い。全員の了承をもらっているからな」

なら良いかな。僕もちーねえと一緒に部屋っていうのは嬉しいし。

「なら、問題無いよ。これからよろしく、ちーねえ」

「ああ、此方こそ」

そうこういつている間に部屋に着いたようだ。

「ここだ」

そう言つて、ちーねえがカギを開ける。

中に入ると、甘い匂いが漂っていた。

（これ、ちーねえの匂いか・・・）

「イサム、これからどうする？」

「へ？な、なに？」

やばい。匂いに夢中になつて、ボーっとしてた。

「これからどうすると聞いているんだ」

「そ、そうだな・・・ちよつと長旅で疲れちゃったから寝かせてもらおうかな？」

色々あつて疲れているから結構眠い。

「そうか・・・ならこっちのベッドを使ってくれ。わたしは大浴場にでも行ってくる」

（あ、あれ今、残念そうな顔してたけど・・・気のせいかな・・・）

「うん、わかった。行つてらっしゃい。それと、おやすみちーねえ」

「ああ、行ってくる。おやすみ、イサム。ゆっくり休めよ」

そう言つてちーねえは部屋から出て行つた。僕もベッドに横になる。
「これから僕にとって初めての学園生活が始まるのか・・・楽しくなると・・・い・・・い・・・な・・・」

横になると直ぐに睡魔が襲ってきた。ちーねえの香りに包まれながら、僕は深い眠りに落ちていった。

再会と・・・（後書き）

どうだったでしょうか？感想やご意見などありましたら、お願いします。

後、アンケートというか質問というか

一夏とくっついて欲しいヒロインが居ましたら、リクエストお願いします。

一応作者としましては原作で余り一夏と絡めていない、蘭ちゃんにしようと思っています。

よろしく願いいたします。

初めての学校生活！ いきなり災厄！？（前書き）

本文の前にお知らせです。IS設定の部分でUNICORNを遠距離特化としていましたが、中距離武装型に変更させていただきました。

また、一夏側のヒロインなのですが蘭、シャル、箒とさせていただきますました。それ以外は主人公の方とさせていただきます。

理由としては主人公は千冬の部屋で生活するので、シャルは無理。また、箒は赤椿があるので必然的に一夏だなど。箒に関しては主人公の機体も白なので、白と並び立つものってことで主人公側にしようかなとも思ったのですが、後々にオリキャラでその役目を担う者を出したいと思ったので一夏側とさせていただきます。

白き一角獣と並び立つもの・・・それは・・・

「イサム、ほら早く挨拶しろ」

「は、はい」

ちーねえに言われ、教壇の上に立つ。

「今日から此方のクラスに入ることになりました、日暮イサムです。以後見知り置きを。自分は17歳ですので本来ならば2年生なのですが、ISについては1年生ということになっておりますので1年生として入学することになりました。これから、どうかよろしくお願い致します」

そう言い、お辞儀をすると拍手が起こった。・・・約1名、金髪の外国人だけは拍手をしていなかった。まあ、気にしても仕方ないか。

「イサムは諸事情により学校生活は始めてだから、全員で助けてやってくれ。それでは、2、3の質問を許す。聞きたいことがある者は居るか？」

そう、ちーねえが聞くと一夏と金髪の女の子以外の全員が手を挙げていた。そして一人が指された。

「やった！あの趣味は・・・」

「そういうことは後で個人的に聞け」

ちーねえが遮ると、凄く残念そうな顔をした。

「じゃ、じゃあ、声明で篠ノ乃博士が ゆーくんと呼んでいたのは何故ですか？お名前にゆって入って無いですよね？」

「えっと、それはですね・・・僕の名前のイサムは漢字で書くと、勇気の勇なんです。そこからとって、ゆーくんにしたそうです」

「そうなんだー、ありがとうございます！」

納得したみたいだ。お礼を言って席に着いた。

「次」

「はい、えっと・・・失礼ですが目が光っているように見えるのですが、何故でしょう？」

一番答えにくい質問がきた・・・どうしよう？

「これはですね・・・力、カラーコンタクトです！」

「なるほど、ありがとうございます！」

とりあえずセーフかな？

「よし、質問はここまでだ。HRはこれで終了とする。各自、あとは好きにしろ。イサム、お前の席は織斑の隣だ」

そう言い残し、ちーねえは教室を出て行った。僕も自分の席に向かう。僕の席の隣には親友の姿がある。

「やあ一夏、久しぶり」

「ああ！久しぶりだなイサム！！お前、今まで何処に行ってたんだよ？」

「いや、色々あつてね・・・」

「そっか。ま、今となってはどうでもいい話だ。これからよろしくなイサム！」

そういつて一夏が手を差し出してきた。

「うん、こちらこそよろしく」

差し出された手を握り、僕達は固い握手を交わした。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ・・・」

すらすらと教科書をよんでいるのは、山田真耶先生。このクラスの副担任というものらしい。

（ここらへんも全部暗記しちゃってるしな・・・）

正直言つてつまらない。覚えている内容の反復ほど退屈なものはないだろう。

（体、動かしたいな）

などと考えていると不意に隣から唸り声が聞こえてきた。隣に目を向けると、一夏が教科書を睨みながら唸っていた。

小声で一夏に話しかける。

（一夏、唸り声なんかあげて如何したの？）

（ん？あ、ああ、いや、行っていることがさっぱり解らなくてな）

（入学前に参考書が配布されたって聞いたけど？）

（それがな・・・古い電話帳と間違えて捨てちゃった）

衝撃的な告白。どこかで抜けてしまっているのは変わらないらしい。

（しかもな、困ったことに決闘することになっちまってるんだよ。

イギリス代表候補生のセシリア・オルコットって奴と）

本日2度目の衝撃告白。

（それって、まずいんじゃない？決闘するのに何も知らないなんて）

（だから困ってるんだよ。一応箒のやつが教えてくれてるんだけど、説明が全然わからなくてな・・・）

箒ちゃんね、あの子は感覚的に覚える子だったからな。無理も無い。

（じゃあさ、一夏さえ良ければ僕が教えてあげようか？）

そう問いかけると、一夏は九死に一生を得たみたいな顔をした。

（ほ、ほんとか！すっげー助かる！！是非お願いします！！！）

（じゃあ、今日の放課後からね）

（了解！）

ちようど話し終えたところでチャイムが鳴り、初めての授業は終了した。それにしても、放課後が楽しみだ。

帰りのSHRの時間になった。ちーねえが教壇に登り、口を開く。

「早速だが本題に入る。この前クラス対抗戦の代表者についての話をした際、織斑とオルコットで意見が分かれたために決闘をし、勝った方を代表とする。ということになったが、イサムが新しく入ってきたのもう一回意見を聞くことにした」

ざわざわと教室がざわめきだす。すると一夏が

「はい！はい！！俺はイサムを推薦します！！！」

凄く必死に僕を推薦してきた。

「え？ちよつと待つ・・・」

僕が言い終わらないうちに

「私も賛成です！」「わたしも！」「それでいきましょー！」
などと、どんどん広がっていく。

すると突然

「バン！！！！」「バン！！！！」

机をたたく音が響き、続いて怒気を孕んだ甲高い声が響いた。

「納得できませんわ！！！！そのような者にやらせるくらいなら織斑の方が100倍マシです！！！！！！！」

セシリアSIDE

気に入らない。一目見てそう感じた。何よりも気に入らないのは、

あの媚びるような目と笑み。それはわたしに自らの父を連想させた。

父は、母の顔色ばかりうかがう人だった。名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだらう。幼少のころからそんな父親を見て、私は「将来は情けない男とは結婚しない」という思いを幼いながらに持った。そして今、私の一番嫌いなタイプの男がこのクラスにやってきた。私には、あんな男がISを使えるということが我慢ならなかった。それをクラス代表にする？

冗談、じゃ、無い！！！！！！

「バン！！！！！！」「バン！！！！！！」

私はあらん限りの力で机を叩き、立ち上がった。

「納得できませんわ！！！！そのような者にやらせるくらいなら、織斑の方が100倍マシです！！！！！！！」

「大体！クラス代表には一番力のある者があるのが当然でしょう！媚びた笑顔をするだけしか取柄の無いような男になるものでは断

じてありません！！！！！」

爆発した感情は止まらない。充分に間を取り

「このような極東の猿に任せると仰るのであれば、私はイギリスに帰らせていただきます！！！！！！」

イサムSIDE

音がしたほうを見ると、あの金髪の女の子が怒りに満ち溢れた目でこちらを見ていた。

「納得できませんわ！！！！そのような者にやらせるくらいなら、織斑の方が100倍マシです！！！！！！」

「大体！クラス代表には一番力のある者があるのが当然でしょう！媚びた笑顔をするだけしか取柄の無いような男になるものでは断じてありません！！！！！！」

（なんか凄い言われよう）

何かしたっけ？と思い、今日一日を振り返るが特に思い当たる節も無い。などと考えていると

「グシャッ！！」

何かが潰れた音がした。慌てて教壇のほうを見ると・・・案の定、コメカミに青筋をたてボールペンをグシャグシャに握りつぶしているちーねえが居た。

（あれはヤバイな。ちーねえって昔から僕の悪口言われるとマジギレしてたよね）

「このような極東の猿に任せると仰るのであれば、私は国に帰らせていただきます！！！！！！」

そう言つて金髪の女の子は席に着く。言いたいことは言い切ったみたいだ。

何とか穏便にと思い、「こう仰っていますし、辞退します」と言おうとしたら

「ならばオルコット、イサムと決闘でもしてみるか？」

ちーねえが底冷えるような声で、そう金髪少女に問いかけてた。

金髪少女さん以外はその怒りに気づいたのか、小刻みに震えている。

「望むところです！日暮イサム、あなたに決闘を申し込みます！」

「あれ？一夏とも決闘するんじゃないんですか？」

「織斑の後に貴方の2連続でいいでしょう。私が負けるなどありえないのですから、それくらいの手度は差し上げますわ」

「いや、まだやるなんて言・・・」

「良いだろう。それで行こう」

ちーねえに遮られた。今のちーねえに逆らうのは僕でも無理だ。大人しくちーねえに任せよう。

「勝負は前にも言ったとおり、今から4日後の月曜日の放課後、第3アリーナで行う。織斑、オルコット、イサムは各自準備をしておくように」

「はー、何でこんなことしてるんだろうね僕達？」

「ほんとに・・・」

僕と一夏はアリーナで途方に促されていた。決闘が決まってから早3日がたった。明日が決闘当日だ。あれから毎日一夏の訓練に付き合っている、やっと形になってきたところだ。

「そういえば、一夏のISってまだ来ないの？」

「ああ、まだ来てないらしい」

「困ったな。こういうISが解らなきゃ戦術がたてられない」

「そんなこと言ったら、こないものは仕方ないさ」

「ポジティブだね」

「あせったって何か変わるわけじゃないしな。さてと、俺は明日に備えてもう寝るよ。おやすみイサム」

「うん、おやすみ一夏」

一夏がアリーナから出て行く。そして入れ替わりにちーねえが入ってきた。

「一夏はどんな感じだ？」

一夏が心配なんだろう、少し不安の混じった声で問いかけてきた。

「基本はすべて教えたよ。飲み込みが早いし、応用力もあるから一方的な試合にはならないと思うよ」

「そうか・・・なら少しは安心して見る事ができるか。お前のほうはどうなんだ？」

「僕はまったく問題無いよ」

「そうか。お前とお前のISの戦いしっかり見させて貰うぞ」

「ははは、まあ頑張りますよ」

「ほどほどにね・・・」

初めての学校生活！ いきなり災厄！？（後書き）

何か今回変なところで終わらせてしまいました。すみません。次回、初の戦闘描写に入ります。

蒼の雫VS白式

そして・・・

白き一角獣がついに姿を現す。

「純白の体躯、そして頭部の一本角。まさにUNICORNだな。良いネーミングセンスをしている」

「そのような貧相なISでなにが出来るといいます」

「やってみなければわからん！ってね」

次回、乞うご期待

決闘　そして・・・（前書き）

すみません。昨日は急に残業が入り更新できませんでした。
楽しみにしてください方々、申し訳ありませんでした。

次回の更新はおそらく土曜日になります。

決闘　そして・・・

一夏SIDE

「さ、踊りなさい。わたくし、セシリア。・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

そう聞こえた瞬間、レーザー、レーザー、レーザー。レーザーの雨がこちら目掛けて降り注ぐ。避けようにも回避ポイントが見つからない。四方八方からビームを受け、どんどんシールドエネルギーが削られていく。

「武器、何か武器は!？」

現在展開可能武器一覧・・・一覧?一個しか無い・・・

「武器は・・・近接ブレード・・・これだけか!？」

白式に問いかけるが、ほかの武器が出てくる気配が無い。

「やるしかないんだろ!やるしか!」

素手でやるよりは3倍マシだ!近接ブレードをコールし、展開する。高周波音と共に粒子が放出し、右手の中で渡り1・6メートルぐらいの長刀の形になる。

「中距離射撃型の私に、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・極東の猿は頭がお悪いのですね!」

セシリアの射撃。それを身をひねってかわす。敵までの距離は約30メートル、接近するのは容易くないが・・・

「やってみるさ」

こっちは突撃するしか出来ないんだ。ただ前に、1センチでも前に・・・進むだけだ!!

「・・・27分。猿の分際で良く持ちこたえましたわね。褒めて差し上げますわ」

「そいつはどうも・・・」

シールドエネルギー、残量67。実態ダメージ中破。武器はかろうじて使えるがそろそろ限界だろう。

「ですが・・・そろそろ飽きてきましたし、もう一匹の猿のお相手もしなければならぬので、閉幕と参りましょう」

そういつてセシリアが右腕を横にかざすと、ビットが俺の周囲に展開し一斉にレーザーを放ってくる。更にセシリアの腰部からスカト状のアーマーが外れ、こちらに向かってくる。

（あれは、ミサイル！？まずい、逃げ場が無い！やられる！？）

ドツカアアアアアン！！！！！！

白い閃光に俺はすっぽりと包まれた。

イサムSIDE

「一夏っ・・・！」

モニターを見つめていた箒ちゃんが、思わずといった感じで声を上げた。

ちーねえと山田先生も爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な面持ちで注視している。

「一夏は大丈夫だよ、箒ちゃん。画面をよく見ててごらん」

言われたとおり箒が画面に目を向けた瞬間、まだかすかに漂っていた煙が吹き飛ばされる。

そしてその中心には・・・

フォーマット

フィッティング

ファーストシフト

「白式・・・ようやく初期化と最適化が終わって、1次移行したか」
そう、あれこそが僕と束さんが一夏の為に開発した白式の真の姿。

「・・・ふん。機体に救われたな、馬鹿者め」

それを見て、ぶっくらぼうにちーねえが言うが、顔には安堵の色が浮かんでいる。

（まったく・・・素直じゃないんだから、ちーねえは）

（ま、それは兎も角、これで機体性能は五分五分になった。あとは一夏が<雪片式型>をうまく使いこなせるかどうか・・・だな）

一夏SIDE

「これが白式の真の姿・・・」

最初のゴツゴツ感が無くなり、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な中世の鎧を連想させるデザイン。そして

「雪片式型・・・」

・・・雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用IS装備の名称。刀に型成した形名。それが雪片。

「やっぱり、貴女は最高の姉さんだよ。千冬姉」

もう守られるだけは御免だ。これからは・・・

「俺も俺の大切なものを守る」

「・・・は？あなた、何を言って・・・」

「とりあえず手始めに、千冬姉とイサムの名前を守る！」

元日本代表の弟。それが不出来じゃ、格好がつかない。そう、あの格好良い千冬姉が格好付かないなんて、冗談もいいところだ。それに、せっかく教えてくれたって言うのに無様に負けたんじゃないイサムに顔向けできねえ。

「というか、顔向けどころか同じ場所に立つてられないだろ」

「だからさつきから何を言って・・・ああもう、面倒ですわ！とっとと墜ちてしまいなさい！」

スターライトmk？からレーザーが放たれる。それを

ズバッ！！

横一閃。雪片で切り払う。機体の瞬間加速度、センサー解像度はさつきまでの比じゃない。圧倒的に使い易い。

「おおおおっ！！」

セシリアの懐に入る為、機体を突撃させる。当然、近づかせまいとレーザーが飛んでくるが

（見える・・・！！）

そのすべてを機体を左右にロールし避け、時には雪片で切り払いながら進んでいく。

（これで・・・決まりだ！！）

セシリアの懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

・・・が、その斬撃があたる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

「試合終了。勝者、セシリア・オルコット」

「へ？」

イサムSIDE

試合をおえた一夏がピットに戻ってくる。何故負けたのか解からないのだろう、呆けた顔をしている。

そこに追い討ちをかけるかのようにちーねえが口を開く。

「よくもまあ、もちあげてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

一夏の評価が馬鹿者から大馬鹿者にグレードアップしている。

「まあまあ、ちーねえそう言わずに。僕は頑張ってたと思うよ？初めて乗った機体であれだけの戦闘が出来れば十分だよ」

「そうか？まあ、教えた本人がそう言うなら、もう何も言わん」

ちーねえはまだ言いたいことがあったのか、しぶしぶといった感じ

で口を閉じる。

「とりあえず一夏は＜雪片式型＞の特性を把握すること。暇があったISを起動したほうが良いね」

「・・・はい」

だいぶ凹んでいるようだ。ま、あんな大見得を切って負けたから仕方ないことなんだろうけど。

「・・・とりあえず、お疲れ様」

「あ、ああ！サンキュー」

これで良し。さてと、次は僕の番か。

「よしイサム。調子に乗りすぎた小娘にきつい灸をそえてこい」

「了解、ちーねえ。それでは行くとしますか」

「来ましたわね」

「今更逃げるわけが無いだろう？」

面倒臭いことこの上無いが、これだけギャラリーが居るのだ。逃げたら後々が気まずい。

「早くISを展開したらいかがです？わたくしはもう準備万全ですわよ？」

「そうさせて貰うよ・・・アリス」

そう呟くと同時にアリスを展開させる。ほんの一瞬、瞬きするよりも早い時間でISが展開する。そして、今までイサムがたっていた場所に純白の機体が現れた。頭部に一本角を持ち、（白き一角獣）の名前を冠する機体・・・ユニコーンが

「それがあなたのISですか」

「ああ、ユニコーンだ」

千冬SIDE

「あれがイサムのISか」

イサムのISは初めて見る。どうやらユニコーンという名前らしい。「純白の体躯、そして頭部の一本角。まさにユニコーンだな。良いネーミングセンスをしている」

しかし、それは見れば見るほど変なISだった。一言で言えば貧相なのだ。普通のISは一夏の白式しかり、セシリアのブルー・ティーズしかり、スラスターや武装など何かしら外見上の特徴的なものがあるのだが、ユニコーンにはそれが無い。頭部の一本角をのぞけば、人間に見えるといっても過言ではない。

そして、もう一つ他のISと大きく違うのは肌の露出が無いということである。つまり全身装甲<フルスキン>なのだ。

（従来のISとは全く違う。何だ、あれは？それに・・・コアの特定が出来ない。まさか・・・468機目・・・？イサム、お前はいつたい・・・？）

「お！始まるみたいだな」

一夏の声に思考の渦から引き戻される。モニター画面を見ると、今正に戦いが始まるうとしていた。

イサムSIDE

「そんな貧相なISで何が出来るといいます?」

「やってみなければわからん!ってね」

そう言い合いながら、お互いに距離をとる。

「その顔、吹き飛ばして差し上げますわ!」

セシリアの長銃から何発ものレーザーが放たれる。それを後退しつつ左右に機体を滑らせながらすべて避ける。

「避けた!？」

セシリアの目が驚愕に見開かれる。しかしすぐに気を取り直した、再度こちらに向けレーザーを撃つ。が、それも全て左右のスライドで避ける。

「狙いが甘いよ」

「くっ!ならばこれでどうです!」

そう言い、セシリアが右手を横にかざすと、4機のビットが命令を受け多角的な動きでこちらに向かって接近してくる。

「マスター、あのビットは厄介ですよ!」

「わかつている。ビーム・マグナムを」

右腕に粒子が集まり、一瞬でビーム・マグナムがコールドされる。コールドされたビーム・マグナムをビットに向かって撃つ。

ズッキューーーン!!!!!!

とてつもない轟音と共にビームが発射され全てのビットが一瞬で一瞬で火球と化し、衝撃波を四方に拡散される。

「そんな、たった一発で!?!なんて威力・・・ですが!」

驚愕したセシリアだがそれも一瞬、更に腰からミサイル型のBTを射出し追撃にかかる。

「アリス、エフィールドは?」

「エフィールド正常に作動できます」

ならばと左前腕部に装備されている盾を構える。すると盾が上下にスライドし真ん中から球体が現れエフィールド(所謂エネルギーシールド)を展開し、ミサイルを防ぐ。

「機体へのダメージ0。エフィールドのエネルギー168消費、エネルギー残量、832ですマスター」

アリスが機体状況を知らせてくる間にミサイルの爆煙にまぎれ、瞬間加速を使用しセシリアに一気に接近する。
イグニッション・ブースト

やったと油断しているセシリアにイグニッション・ブーストを使用

した勢いそのままに右足でけりを浴びせて吹き飛ばす。

「キヤアアアアア！！！！」

突然の衝撃に悲鳴を上げることしか出来ないセシリアに照準を合わせ、ビーム・マグナムを4発連続で叩き込む！

「敵のシールドエネルギー0、実態ダメージ、レベル低。お見事ですマスター」

アリスが告げる。そして

「試合終了！勝者、日暮イサム！！」

決着を告げるブアナウンスが響き、大きな拍手と喝采がアリーナを包み込んだ。

アリスを待機状態にもどしセシリアのもとへ向かう。

「大丈夫か？」

セシリアSIDE

負けた。それも完璧に。まだ動けない自分の体がそれを物語っていた。不意に声を掛けられた。

「大丈夫か？」

首を回しそちらに顔を向ける。そこにはつい先ほどまで戦っていた男が居た。

「お強いんですね・・・」

思ったことをそのまま口にする。

「まあ、ね」

否定しない。いつもならば愛想笑いをうかべ謙遜する男が、否定しなかった。そして、私に顔を向ける。

「僕には守りたい約束がある。その約束を守るために強くなった。その約束を守るために力を振るうことを決めた。その約束がある限り、僕は誰にも負けられない。それが僕の信念であり覚悟だ。君の胸に信念はあるか？その心に誓いはあるか？・・・力はただ力

なんだ。そこに意味を持たすのは自分自身。意味を持たない力はただの暴力でしかない」

彼の言葉は私の胸に突き刺さった。そうだ・・・ただ気に入らないからと一方的に決闘を突きつけた。これを意味の無い暴力と言わずになにを暴力というか。力の意味なんて考えたことが無かった。信念？誓い？そんなものは無かった。ただあつたのは代表候補生だからと女だからという驕りだけ。自分自身の矮小さに今更気づく。そして思う。自分のなんて醜いことだろうと。それと同時にまぶしく思った。目の前に居る男を・・・彼のようにになりたい。その思いが急速に膨らむ。

「私にも見つけられるでしょうか？力を振るう意味を・・・」

答えを求め、彼に聞く。

「そう考えられるなら、きつと見つけられる。もし、一人で見つけられなかったら・・・僕が隣で一緒に探してあげるさ」

そう笑顔で応えてくれた彼の目は金色に光り輝いていて、今までのような眼差しは無くただただ強い決意が秘められていた

ああ、この方はこんなに醜いわたくしの隣で一緒に探してくれると言っている。この方と一緒にならきつと見つけられる、力を振るう意味を・・・いや、もう見つけられたのかもしれない。

わたくしは・・・わたくしは・・・

貴方のその笑顔を守るために力を振るいたい。

「わたくしの名前はセシリア・オルコットです。あなたのお名前を聞かせていただけませんか？貴方の口から、わたくし一人に向かって聞かせてほしいのです」

そうお願いしたわたくしに彼は極上の笑みを浮かべて

「日暮イサムです。よろしくセシリアさん」

と手を差し出した。

わたくしはその差し出された手をしっかりと握り返した

決闘　そして・・・（後書き）

次回予告

次回、鈴登場！

「あれ？もしかしてすずちゃん？」

「リンよ！リ・ン！！」

「ねえ？約束覚えてる？」

「一夏！あんたのせいでイサムが変な誤解してるじゃない！！謝れ！！！！わたしに謝れ！！！！」

「うるせい、貧乳！！」

次回乞うご期待！

旧友との再会（前書き）

皆さん、地震大丈夫でしたか？

僕はCITIZEN時計の修理センターに勤務しているのですが、部品が散乱したり、せっかく修理した時計が落ちてしまったりと大変でした。今日はその片付けに駆り出されてしまったので更新が遅くなってしまいました。

あと、自分のパソコンが机から落ちて、壊れました。なのでマンキツから更新しています。当分この状況が続くと思いますので暫くは更新が不定期になります。

ご迷惑をお掛けしますがご理解の程、よろしくお願いします。

今回、前回の次回予告の内容までいきませんでした。データのバックアップを取っていなかった僕のミスです。（一応、鈴は出ます）申し訳ありません。

旧友との再会

一夏SIDE

「ということで、クラス代表は織斑一夏君に決定です」

山田先生が朝っぱらから笑えない冗談をかましてきた。

「先生、あの俺負けましたけど？」

「あ、それはですね」

「僕とセシリアさんが辞退したからだよ」

「ええ、その通りですわ」

「は？」

思わず変な声を上げてしまう。

「いや、イサムが辞退するのはわかるが、お前は良いのかよ？」

「ええ、冷静に振り返ってみればわたくしが少々大人げなかったと思います。貴方にお譲りすることにしました。やはりIS操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

何かこいつ変わってないか？柔らかくなっただっていうか・・・それにさっきからイサムに熱のこもった視線向けてるし。

それにしても、何というありがた迷惑な話だ

「そ、それですわね」

子本と咳払いをして、あごに手を当てるセシリア。

「クラス代表になっていただくからには、それなりに強くなっているただかなくてはなりません。ですから、どうでしょう？イサムさんとわたくしで貴方にIS操縦を教えるというのは」

バン！突然、机をたたく音がひびく。立ち上がったのは箒だった。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私とイサムが直接頼まれたからな」

なんだなんだ？「私」のところだけを異様に強調した箒は、殺気立っている瞳でセシリアを睨んだ。

だが睨まれたセシリアも負けじと反論する。

「中距離射撃型の敵との戦闘を想定した場合、わたくしがいたほうが何かと役に立つと思いますが？」

「だ、だが！」

「良いと思うな。箒ちゃんが接近戦、セシリアさんが中距離戦闘、そして僕が遠距離戦闘って分担すればやりやすいと思うよ」

「むう……」

イサムの一言で箒は何もいえなくなったのか座ってしまった。

「一夏もそれで良いよね？」

もちろん、俺に断る理由なんか無い、ありがたい限りだ。

「ああ、よろしく頼むよ」

「話は纏まったようですね。それでは、わたくしセリア・オルコツトと申します。セシリアとよんでください」

話が纏まったところでセシリアが自己紹介し、手を差し出してきた。

「ああ、こちらこそよろしく、セシリア。俺のことは一夏で良い」
その差し出された手を握り返す。

「では、織斑くんがクラス代表ということで。異論は無いですよね？」

「ありませーん！！」

うん、すばらしい団結力だね……
はあ……面倒なことになった。

イサムSIDE

「ではこれよりISに基本的な飛行操縦をしてもらう。イサム、織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

4月下旬、春特有ののどかな空気に包まれながら僕はちーねえの授業を受けていた。

いわれてから0.3秒という一瞬でアリスを展開させる。僕に数瞬遅れて、セシリアさんもブルー・ティアーズを展開する。僕が破壊したビットは完全に修復されたみたいだ。

「流石にイサムとオルコットは早いな・・・それに比べて、織斑。何をしている、早くしろ」

相変わらず、一夏には敵しいちーねえ。僕とセシリアさんに遅れること数秒、ようやく一夏も白式を展開する。

「よし、飛べ」

いわれてすぐ急上昇し、空中で静止。セシリアさんも少し遅れて僕のところまで上昇してきた。

「流石にお早いですね」

「セシリアさんも中々の速さだよ。流石、代表候補生に選ばれただけのことはあるよ」

「そ、そんな／＼」

あれ、照れちゃったのかな？セシリアさんは急に顔を赤くして俯いてしまった。

考えてもわからないや。乙女心は難しいってやつだろ、きっと。

「お、お前ら早すぎ」

一夏も上がってきた。

「まあまあ、そのうち追いつけるよ。一夏、筋良いし」

「そうですね。何せわたくしとイサムさんから教わっているのですから」

「イサム！オルコット！！ 何を楽しそうに喋っている！早く降りて来い！！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。見ると、ちーねえが山田先生からインカムを奪い此方を睨みつけていた。

（何をあんなに怒ってるんだろ？ただ、一夏とセシリアさんと話してただけなのに）

「ちっ、イサム、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ」

「了解、ちーねえ」

言って、すぐさま頭から地表に向かって急降下する。地面から10センチのところで体を反転させ逆噴射をかけ停止する。

遅れてセシリアもちょうど10センチのところまで急降下し僕の右隣に停止する。

ズツドオオオオオオン！！！！

不意に僕の左側からものすごい大きな音がした。見ると一夏が大きな穴を開けて墜落していた。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「・・・はい」

ちーねえ、容赦無いね・・・

「まあ良い、次だ。武装を展開してみる。それぐらいは自在にできるようになったらう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ、馬鹿者」

「は、はい！」

「よし。はじめろ」

言われて、一夏が雪片式型を展開する。

「遅い！0・5秒で出せるようになれ」

ちーねえ、それは幾等なんでも厳しすぎだろ。

「イサム、見本をみせてやれ」

「了解」

すぐまビーム・マグナムを展開。勿論、すでに発射可能な態勢だ。

「流石だ。織斑、イサムをよく見習え。よし、では今日の授業はこ

こまでだ。各自訓練は怠らないように。あと、穴を開けた大馬鹿者、

グラウンドは元に戻しとけよ」

そついい残すとちーねえはさっさと校舎に戻ってしまう。

「とりあえず片付けよつか。僕も手伝うからさ」

「わたくしもお手伝いいたしますわ」

「わ、悪いな二人とも」

??? SIDE

「ふうん、ここがそうなんだ」

夜。IS学園の正面ゲート前に小柄な少女が立っている

「えーっと、受付ってどこにあるんだろう？」

とりあえず、適当にあるいてみよう。まずは行動あるのみよ。

（誰かいらないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）
学園内の敷地をあるきながら、キョロキョロと人影を探す。

（あいつもここに居るんだよね？）

とある男子を思い出す。大切な約束を交わした男子。でも、ある日突然どこかに行ってしまった。

元気かな、アイツ・・・

「こんな時間にそんな重そうな荷物を持って、どこかしましたか？」
不意に後ろから声をかけられた。

・・・・今の声って・・・

期待に胸を膨らませ、後ろを振り向く。

そこには期待通りの人物が立っていた。

イサムSIDE

一夏のIS訓練に付き合った後、何気なく外に出てみると一人の小柄な少女が大きなボストンバッグを背負って、キョロキョロとしきりに首を振っていた。

どうしたんだろう？不振に重い少女に声をかける。

「こんな時間にそんな重そうな荷物を持って、どこかしましたか？」

ビクッと少女の方が震える。そしてゆっくりと此方に顔を向ける。
あれっ？みたことある顔だ。

「あれ？もしかして、すずちゃん？」

「リンよ！リ・ン！！」

「ああ、やっぱり！」

振り返った顔は僕のよく知っている顔だった。

ファン・リンイン
鳳鈴音。日本を離れるまえに出来た最後の友達がそこに居た。

「どうして、ここに？」

「ISの操縦者だからにきまつてるじゃない」
確かに。それはそうだ。

「まあ、なんにしても久しぶりすずちゃん」

「だからリンだって・・・はあ、もう良いわ。久しぶりねイサム」
お互いに挨拶を交わし、手を握り合う。

「あんた、どこに行つてたのよ？」

「当然聞かれてしまうわけで・・・」

「えっと・・・どこでしようかね？」

「ちよつと！まじめに答えてよ！！」

「どうする？何と言つべきか・・・」

「おい！貴様達、こんな時間に何してる！！」

突然の怒鳴り声。そちらを見るとちーねえが此方に向かつてきている。

「イサム？こんな時間にどうし・・・ん？お前は鳳か？」

「お、お久しぶりです千冬さん」

すこし怯えたような口調になるすずちゃん。そういえば昔からちーねえのこと苦手だったよね。何でだかは知らないけど。

「ちよつと良い。部屋まで案内してやる、ついて来い」

そう言つてスタスタと歩いていくちーねえ。その後をすずちゃんが

トタトタと小走りについて行く。僕も慌てて後を追う。

（ね、イサム部屋の部屋ってどこ？あとで遊びにいきたいんだけど）
歩きながらすずちゃん小聲で聞いてくる。それに答えようと僕が口を開く前にちーねえが口を開く。

「イサムは私と同じ部屋で生活している。遊びに来るのはかまわんが妙なまねをイサムにするなよ？ま、しようとしたら部屋から叩き出すがな、わ・た・し・が」

「あ、あはははは・・・冗談ですよ、冗談に決まってるじゃないですか」

「ああ、そうしておいたほうが良い。命が惜しければな」
何だろう？ちーねえが怖い・・・

「じゃ、また明日ね。おやすみ、すずちゃん」

「うん。また明日。おやすみイサム、千冬さん」

「ああ、ゆつくり休め」

互いに他愛も無い話をしてると、すずちゃんの部屋についたので互いに挨拶をし別れた。

「ずいぶんと嬉しそうだな？」

不意にちーねえが問いかけてきた。責めるような口調なのは気のせいだろうか？

「友達と再会できて嬉しいのは当たり前でしょ？」

「本当に・・・それだけか？」

どうしたんだろう？今度は急に弱気になって

「それ以外に何かあるの？」

「いや、そうだったな。お前のような朴念仁に限ってそんなことは

無いか・・・わたしの気持ちにすら気づかないくらいだからな」

「ん？最後何て？」

「な、なんでもない！」

ま、なら気にしなくていいか。

それにしても明日からまた楽しくなってくるな！

旧友との再会（後書き）

いかがだったでしょうか。たぶん次回は一夏VS鈴と。イサムVS襲撃者になると思います。

「鈴」

「なによ？」

「本気でいくからな」

「何だ！？何が起きている？」

「アリス、フォームチェンジ。ウイング0だ」

「シールド・エネルギー200をツインバスターライフルのチャージエネルギーに変換。遮断シールドを破壊後、ユニコーンにフォームチェンジし内部に突入、鎮圧する」

「！・・・もう一機？いや、二機か！？」

「アリス、あれを使うぞ・・・」

「・・・了解。IS-D 起動します」
インフィニット・ストラトスデストロイヤー

クラス代表戦 襲撃者現る（前書き）

すみません。更新遅くなりました。自分のパソコンが地震で壊れ、マンキツで執筆しているため時間が限られてしまっています。申し訳ありません。

今回はちょっと長めです。

また、もっと改行したほうが見やすいという意見があったので書き方を変えてみました。

では、本編をお楽しみください。

クラス代表戦 襲撃者現る

イサムSIDE

「おはよー、イサム。そーい、や、転校生の噂聞いたか？何でも中国の代表候補生らしいぞ。しかも俺らと同じ年頃らしい」

朝、席に着くなり一夏に話しかけられた。

「ああ、知ってるよ。昨日会ったしね」

「マジか！？どんな子だった？」

「一夏が良く知っている子だよ」

「え？そーなのか？誰？」

「それは会ってからの楽しみってことで」

一夏との会話がちょうど終わったところで、廊下から突然声がする。

「このクラスの代表って誰？」

その声に一夏が驚いて顔を向ける。

そこには腕を組み、方膝を立ててドアにもたれかかっているすずちゃんがいた。

「鈴？・・・お前、鈴か？」

一夏が信じられないと言った顔ですずちゃんに問いかける。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告にきてあげた
ってわけ」

そう言つて鈴ちゃんは、ふっと小さく笑みを漏らす。

「何格好つけてるんだお前？似合つてねえぞ。それと此処のクラス
代表は俺だ」

「余計なお世話よ！！　そう、あんたが此処のクラス代表なのね。
今まで散々バカにされてきたお礼に

ボコボコにしてあげるから覚悟しなさい！！」

いきなり喧嘩腰になる二人。そういえば昔から事あるごとに喧嘩し
てたな、この二人。あれか？犬猿の仲つてやつ？

「ふん、やれるものならやってみろ！このチンチク鈴が！！」

「んな・・・！！？言つてくれるじゃない、バカー夏のくせに！
！」

幼稚園児の喧嘩だ。それから、すずちゃん。後ろにちーねえ居るの
気づいてる？

「おい」

「なによ！？こっちは今いそが」

バッシン！！

すずちゃんがい切る前に、ちーねえの出席簿アタックが炸裂した。

「もうSHRの時間だ。さつさと自分の教室に戻れ」

「ち、千冬さん………」

「織斑先生だ。入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません………」

すぐごとドアからどくすずちゃん。

「一夏、覚えてなさいよ！それとイサム！昼休みに学食で待ってるからー！」

「さつさと戻れ」

「は、はい！」

2組に向かって猛ダッシュ。朝から元気だなすずちゃん。

「あ、あのイサムさん……あの子とはどういう関係で………」

「おい！一夏！！今のは誰だ！？随分と親しそうだったな」

セシリアさんが僕に、箒ちゃんが一夏に質問してくる。そのほか、クラスメイトから質問口撃の集中砲火。みんな、ちーねえ居るの忘れてない？

バシン！バシン！バシン！バシン！バシン！バシン！バシン！

「席に着け、馬鹿ども」

案の定、出席簿マシガンが火を噴いた。何故かセシリアさんだけ音が違う。

「な、何で俺がぶたれなければならない・・・」

「お前が嵐を挑発したからこうなったんだ。当然だ」

一夏って毎日叩かれてるよね・・・変な道に目覚めなければ良いけど・・・

「イサムさんが悪いのですわ！」

昼休み、開口一番にセシリアさんが文句を言ってきた。

「お前のせいだ！」

隣では同じように一夏が箒ちゃんに文句を言われていた。

このふたり、午前中だけで山田先生に注意5回、ちーねえに3回叩かれている。いったいどうしたんだろう？

ちーねえの前でぼーっとしているなんて「叩いてください」って言うようなものだ。

「は！まさか・・・そっちに目覚めてしまったのか！？」

『目覚めていませんわ（いない）！！』

何だ、違うのか・・・

「ま、良いや。僕はこれから学食に行くけど、みんなはどうする？」

「俺も行くぜ」

「わたくしもお付き合いいたしますわ」

「い、一夏が行くというならば私もいつてやつても良いぞ」

みんな学食にするみたいだ。僕たちは揃って学食に移動した。

「イサム、こっちこっち！」

学食に入るや否や、すずちゃんに声をかけられる。学食のおばちゃんから日替わりランチを受け取り、そっちに向かう。ちょうど4人分の席が空いている。僕はすずちゃんの隣の席に座った。ほかの面々も思い思いの席に座る。

ちなみに、すずちゃん、僕、セシリアさん。向かいに一夏、箒ちゃんという感じだ。

「んで？鈴、お前いつ日本に帰ってきたんだよ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「別にあんたに関係ないでしょ？それよりも、あんたなにISなんか使ってるのよ？」

「それこそお前に関係無いだろ。つーか何でIS使えるのかなんてこっちが知りてえよ」

一夏が言うにはすずちゃんは1年前に中国に戻ってしまったので、約1年ぶりの再会らしい。そのせいか2人だけで会話が進む。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「わたくしもイサムさんとの関係を聞いていませんわ」

疎外感を感じたのだろう。セシリアさんと篝ちゃんが多少棘のある声で、僕と一夏に聞いてくる。

「どういう関係って言われても・・・なあ？」

「ねえ？」

「ただの幼馴染としか言いようがない・・・よな？」

「うん、ただの幼馴染だよな」

そういった瞬間、すずちゃんに睨まれたような気がした。なんか悪いこと言ったかな？

そういつた瞬間、すずちゃんに睨まれたような気がした。なんか悪いこと言ったかな？

「幼馴染だど？」

怪訝そうな声で聞き返したのは箒ちゃん。

「あー、箒って小4の時に引っ越していったろ？こいつが転校してきたのは小5の頭なんだ。ま、言うなればセカンド幼馴染。で、お前がファースト幼馴染」

そういえば箒ちゃんとすずちゃんって面識ないんだったね。ちょうど入れ違いで引っ越してきたから。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言っただけで挨拶を交わす二人。すると何やらすずちゃんが箒ちゃんの耳に口を持っていき、何かをつぶやいた。

（安心して、わたし一夏には興味無いから）

（そ、そうなのか？なら良かった・・・）

「って、何でそこで一夏が出てくる!!」

「ん？俺がどうかしたか？」

「い、いやなんでもない・・・」

何故か箒ちゃんの顔は真っ赤だ。すずちゃん、箒ちゃんに何を言ったのさ。

「では、わたくしもご挨拶を。イギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します。よろしく願いします」

「うん、よろしくね!」

（イサムは渡さないよ。なんたつて将来を約束した仲だからね）

（何ですって!??ですが、負けませんわ!）

セシリアさんにも耳打ちするすずちゃん。何だか勝ち誇った顔をしている。

「ねえイサム、あの約束覚えてる?」

突然、すずちゃんがといかけてきた。
約束? ああ、あれか。

「わたしが大きくなったら、わたしが作った酢豚を毎日食べてくれる? ってやつだよね?」

「う、うん。良かった覚えててくれたんだ・・・」

「つまり、毒見役ってことだよな?」

「・・・・・・は?」

目を丸くするすずちゃん。

「違うの？一夏がそういうことだって教えてくれたんだけど・・・」

そう言った瞬間、すずちゃんは阿修羅の如き形相で一夏を睨んだ。

「ちょっとバカ一夏！！アンタ何変なことをイサムに吹き込んでんのよ！！謝れ！！わたしに謝れ！！！！」

「は？意味わからん？何をいきなりキレてんだよ？この馬鹿！」

「馬鹿！？今、馬鹿って言ったわね！！アンタに言われたくないわよ、このバカ一夏！！」

「うるせえ、貧乳！！」

あ。言うてはならないことを・・・

ドッガアアアアアアアン！！！！！！

いきなりの爆発音、そして衝撃で学食が揺れた。見ると、鈴ちゃんの右腕には部分的にISが展開されていた。

「ア、ア、ア、アンタ、い、言ったわね・・・・・・。人が一番気にしていることを言ったわね！！」

うん。これはマズい。本気で怒ってる。

「本当のことだろうが」

一夏、火に油を注いでどうする・・・

「昔のよしみでちょっとは手加減してあげようか思ったけど、どうやら死にたいらしいわね・・・。いいわよ、全力で叩き潰してあげる」

最後に今まで見たことの無い鋭い視線を一夏に送り、すずちゃんは食堂から出て行った。

「ふん！返り討ちにしてやる。イサム、放課後付き合ってくれよ」

「うん、良いよ」

また面倒なことになってしまったな・・・

試合当日、第2アリーナ第1試合。組み合わせは一夏とすずちゃん。うわさの新人同士の戦いとあって、アリーナは全席満席。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

僕の視線の先では一夏の白式とすずちゃんの甲龍しえんりゅうが静かに開始のと

きを待っている。

すずちゃんの甲龍はセシリアさんのブルー・ティアーズ同様、非固^{アン}定浮遊部位が特徴的だ。方の横に浮いた棘付き装甲がやたら攻撃的な自己主張をしている。

一夏の白式と同じ近距離型、しかも典型的なパワータイプだということが見てとれる。

「それでは両者、規定の位置まで移動してください」

アナウンスに促され、二人が空中で向き合う。

「始まる、か・・・」

一夏SIDE

アナウンスに促され俺と鈴は空中で向かい合い、開放回線^{オープン・チャンネル}で言葉を交わす。

「泣いて謝るなら少し痛めつける程度で許してあげるわよ」

「誰がそんなことするか。全力で来い」

強がりでもなんでもない本心。真剣勝負するのはお互いに本気でやるのが筋ってもんだからな。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シー

ルド・エネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

その通りだ。言わば「殺さない程度にいたぶることは可能」ということである。

「そんなことは解ってるよ」

「それでは両者、試合を開始してください」

ピーツとブザーが鳴り響く、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた。

ガッギイイン！！

俺の雪片式型と鈴の持つ巨大な双刃のついた青竜刀がぶつかり合う。
が、鈴の力に押し負けはじき返されてしまう。

瞬間にイサムに習った三次元躍動旋回を使い、鈴を正面に捉える。
クロス・グリッド・ターン

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど・・・」

そう言い、鈴は青竜刀をバトンのように回し始める。あの回転が非常に厄介だ、遠心力が上乘せされて攻撃が重くなるし、さばくのも難しい。

（このままじゃ、消耗戦になるだけだ。ここはいったん距離を取って・・・）

「甘いッ！！」

距離を取ろうと後退した瞬間、俺は見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「何だ！？」

突然の攻撃に戸惑いながらも攻撃の出所を探す。

そして、鈴の肩アーマーが開いていることに気づく。

（まさか、あそこから？）

「今のはジャブだから」

にやりと不適な笑みを浮かべる鈴。

ジャブの後はストレートと相場が決まっている！

ドンッ！！

見えないこぶしに殴られ、地表に打ち付けられる。痛みがシールドバリアーを貫通して届く。ダメージも開始早々76くらっている。これは、かなり、まずい。

「よくかわすじゃない。衝撃砲<龍砲>は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

そう、その通りだった。砲身さえ見えれば砲弾が見えなくても回避することは難しくないが、砲身も見えないとなれば話は別だ。しかも厄介なこと砲身斜角の制限がほとんど無いらしく、真下、真上、さらには真後ろまで展開して撃ってくるのだ。

（ハイパーセンサーで空間の歪み値と大気の流れを探っているが、撃たれてからわかるようでは遅すぎる。どこかで先手を打たないと・・・）

ぎゅっと右手の雪片式型を握り締め、先週の訓練を思い出す。

「バリアー無効化攻撃？」

聞き返すと、イサムは小さくうなずいた。

セシリア戦の後、俺はどうしていきなり試合が敗北になったのかあれこれと考えていたのだが結局わからず、イサムに教えてもらうことにした。

「そう、それが雪片の特殊能力。相手のバリアー残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることができる。そうなる、どうなる？」

「えーっと、ISの絶対防御が発動するから・・・大幅にシールドエネルギーをそぐことができる・・・かな？」

「正解。ちーねえがかつて世界一の座にいたのも、雪片の能力によるところが大きいんだ」

「ふーん。でもそれと俺が負けたのと何の関係があるんだ？」

「雪片の圧倒的攻撃力の源はシールドエネルギーなんだ。つまりシールドエネルギーを攻撃力に転化してるんだよ」

「成る程、だから・・・でも、俺に上手く扱えるかな・・・？」

「大丈夫さ。一夏はちーねえの弟なんだから」

「ああ！そうだよな！！」

それからの訓練はすべて近接戦闘と急加速停止といった基礎移動技能に費やした。

（そうさ、あれだけ訓練したんだ。イサムも千冬姉だって見てるんだ、負けられないよな）

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

鈴はバトンのように青竜刀を回転させて持ち直す。俺は衝撃砲がその砲火を吹く前に距離をつめようと加速態勢に入った。

イグニッション・ブースト。俺がこの1週間で身に着けた技能だ。

「うおおおおっ！！」

この奇襲は1回しか通用しないだろう。だからこそ雪片式型のバリ
アー無効化を同時に放ちながら突撃する。

ズドオオオオン！！！！

突然、おおきな衝撃がアリーナ全体を走った。鈴の衝撃砲とは比べ
物にならないくらいの範囲と威力だ。

見ると、ステージ中央からもくもくと煙が上がっている。どうやら
さっきのは「それ」がアリーナの社団シールドを貫通して入ってきた
衝撃波らしい。

「な、なんだ？何が起こつて・・・」

状況がわからず混乱する俺に、鈴からプライベート・チャンネルが
飛んできた。

「一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！」

いきなり何を言っているんだ？そう思った瞬間、ISのハイパーセ
ンサーが緊急通告を伝えてきた。

「ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされていま
す。」

「なんだって！？」

イツ・ア・ピーンチ？

「一夏、早く！！」

「お前はどうすんだよ？」

「わたしが時間稼ぐから、アンタは逃げなさい！」

「んなことできつか！俺もやるぞ」

「何、バカなことやってんのよ！アンタじゃ無理よ！！」

「あぶねえ！！」

間一髪、鈴を突き飛ばす。その直後にさっきまで居た空間を熱線が通り抜けた。

「ビーム兵器かよ。イサムのISと同じくらいの出力があるんじゃないか？」

「一夏、来るわよ！！」

鈴の声に反応し、ビームの連射を避ける。

「なんなんだよ、こいつは・・・」

その襲撃者はイサムのユニコーンフォームのような姿をしていた。違うのは頭の角が一本角ではなく、二本角でV字をしているところぐらいだ。身体は赤を主体とした色合いで、肩に大きなランチャーがついている。おそらくあれが遮断シールドを破ったものだろう。

「お前、何者だよ」

「別にわたしが誰だって関係無いでしょ？アンタはここで死ぬんだし」

軽薄そうな女の声。

（こいつ！）

「一夏、わたしたちが食い止めないと観客席の人たちに被害が及ぶわ」

「ああ、わかってる。行くぞ、鈴！」

「織斑くん！鳳さん！危険です！いますぐアリーナから脱出してください！先生たちがISで制圧に行きます！」

割り込んできたのは山田先生だった。しかし、脱出はできない、何故なら遮断シールドがレベル4で張られてしまった。おそらく襲撃者のせいだろう。

「今からでは遅いです！大丈夫です。やれます！」

「一夏、援護は任せなさい！」

やってやるさ。俺がみんなを守ってみせる。

イサムSIDE

「！？・・・何だ？嫌な感じがする・・・」

お手洗いから帰る途中、急に頭を何かが通り過ぎたような感覚と共に背筋に悪寒が走った。

（何だ？何かが起こる？）

急いでアリーナに戻ろうと走りだした瞬間、すさまじい爆発音が響いた。見ると、アリーナから黒煙があがっている

「くそ！！襲撃されたのか！？」

「マスター、アリーナの遮断シールドがたった今レベル4に設定されました。また、全ての扉がロックされています。外部からのハッキングを受けているようです。現在、織斑一夏と凰鈴音が戦闘中。」
アリスからの状況報告。どうやらアリーナに居た生徒達はみんな閉じ込められたらしい。

「助けにいかないと！」

言うが否や外に飛び出しアリスを展開する。
ユニコーンフォーム、しかしこの形態ではあの遮断シールドを破る術が無い。だから、今回はこれを使う。

「アリス、フォームチェンジ。ウィングゼロだ」

「了解。フォームチェンジ、ウィングゼロ」

ユニコーンが粒子に包まれ、次の瞬間別の姿が現れる。

天使の翼のような純白の翼を持ち、長大な銃<ツインバスターライフル>を装備している形態、ウィングゼロ。

翼を羽ばたかせ、一気にアリーナ上空に飛翔し、ツインバスターライフルをアリーナに向けて構える。

「シールド・エネルギー200をツインバスターライフルのチャージエネルギーに変換。遮断シールドを破壊後、ユニコーンにフォルムチェンジし内部に突入、鎮圧する」

「了解です。・・・ツインバスターライフル、チャージ完了。いつでも撃てます」

「了解。遮断シールドを破壊する」
トリガーを引いた瞬間

ドッゴオオオオオオオン!!!!!!!!!!

すさまじい爆発音が響き、遮断シールドがかき消される。

「避けられたか」

遮断シールドを狙うと同時に中の襲撃者にも当たるようにしたのが回避された。

すぐさま形態をユニコーンに戻して内部に突入する。ウィングゼロは遠距離特化の形態のため狭い敷地内での戦闘には向いていないの

だ。

中では一夏と鈴が襲撃者と戦闘を繰り広げていた。二人がかりで押されている。

牽制のビームガトリングを放ち、襲撃者を一夏たちから遠ざける。

「一夏、すずちゃん！こいつは僕が引き受ける！二人は脱出しろ！」

「ま、待ってくれ！俺も一緒に戦う！」

「イサム一人置いていけるわけないでしょ！」

「二人とももうシールドエネルギーがそんなに残ってない！これは模擬戦じゃない！下手をすれば死ぬぞ！今なら遮断シールドが消えている、復旧される前に逃げろ！」

僕の言葉を聞き、一夏とすずちゃんは下を向いて俯いた。

「わかった・・・だけど約束しろ。絶対アイツをぶっ飛ばすって一夏が顔を上げそう言ってきた。

「ああ、もちろん」

「ちょ、ちよつとそれで良いわけ！？」

すずちゃんは納得できないのか、一夏に反論する

「俺らが居てもイサムの邪魔になるだけだ。今はイサムを信じる」

「・・・わ、わかったわよ。イサム、絶対無事に帰ってきてね」

「うん、ありがとう、すずちゃん」

二人は揃ってピットに入っていた。そして再び、アリーナが遮断シールドに覆われる。

「さてと・・・よくもやってくれたね」

ビーム・ガトリングの発射を止め、襲撃者と向き合う。

「アンタが例の二人目？そっちから来てくれるなんて助かったわ。探す手間がはぶけた。さっさとIS渡してくれる？」

軽薄そうな女性の声、こいつの狙いは僕と一夏のISって訳か。

「それはできない」

即答で返す。寝言は寝て言え。

「あっそう。じゃ死んで」

そう言っていきなり手に持っている銃からビームを発射する。それを半身になって回避しつつビーム・マグナムをコールし、後ろに後退し距離をとる。

「マスター、あの機体から生体反応を確認できません。おそらく無人機かと」

十分な距離をとったところでアリスから報告が入る。その報告に僕は驚く、なぜならまだ無人機というのは開発段階で存在しないはずだからだ。

「ということは無人機の遠隔操作ってことか・・・」

「はい、おそらくは」

「なに、ゴチャゴチャと喋ってんのよ!!」

敵がビームを連射してくる。それを急上昇で回避し、お返しにとビーム・マグナムを撃つ。

ズッキュウウウウウン!!

轟音が鳴り響き火球が敵に向かっていく。しかし、敵はそれを右に機体をロールすることで回避し、すぐさま近接ブレードをコールして此方に突撃してくる。

「さつさと堕ちろ!!」

「誰が、堕ちるか!!」

僕もそれに対応するため、前腕部に取り付けられているビーム・サーベルを取り、光刃を発生させ突撃する。

すれ違いざまにビーム・サーベルを横薙ぎに振るう。

バシィィイツ!!!!!!

一瞬の接触。敵の近接ブレードとビーム・サーベルがぶつかり合い、火花を散らす。

お互いに前方に斬り抜け、旋回しまた斬りあう。

バシイイイイイツ！！！！！

バシイイイイイイツ！！！！！

バシイイイイイイツ！！！！！

「コイツ、男の癖に！！」

「悪いけど、特別製だから・・・ねッ！！」

上段からの大振りの一撃を半身になって回避し、ガラ空きの胴体に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「くっ！この私に蹴りを入れた！？」

間髪入れずに追撃。

敵は体勢を立て直しながら、手に持った銃で応戦してくる。

しかし、そのことごとくを右に左に方向転換することで回避し、懷に飛び込む。

「貰った！！」

ビーム・サーベルを袈裟払いに振るう。

ズバッ！！！！

ビーム・サーベルは豆腐を斬るかのように容易く敵の右腕を切り裂いた。右腕部が肩に付いていたランチャーと持っていた銃と共にしに落ちて行き、爆散して衝撃波を四方に飛ばす。どうやらこの無人機にはシールドエネルギーが無いらしい。

「ハイメガが！？お前、よくも！！！」

敵が激高し突撃してくるが、冷静さを欠いた攻撃は容易く対処できる。

真っ向から突っ込んできた敵を右に身体をずらすことでやりすごし、すれ違いざまに腕を掴む。

幼い頃、ちーねえの修行に付き合っていた時に会得した技術だ。ISでやるのは初めてだったがうまくできた。

「なにっ！？」

「終了だよ」

そのまま、零距离でビーム・マグナムを撃とうとした瞬間

ドオオオオオオッン！！！！

轟音と共に色とりどりのビームが此方に向かって降り注いだ。

「くっ！！」

咄嗟に掴んでいた腕を放し、左腕の盾を構えて後退し、それを回避する。

上空を見ると遮断シールドが破られている。そこから先ほどの攻撃をしたであろう水色の機体がアリーナに入ってくる。

「！・・・もう一機？いや、二機か！？」

再び、此方をビームが襲った。先ほどのものとは色が違うビームだった。

ビームの来た方向に目を向けると、今度は灰色の機体がアリーナに入ってきた。

「ドライ、何を手間取っている？」

「おいおい、まだ終わってねーのかよ」

灰色の機体と水色の機体が今まで戦っていた赤い機体に問いかける。どうやら3機とも同系統の機体のようだ、どの機体もV字の角がある。

「うるさいなー！！だったら手伝ってよ」

「良いだろう」

「しょーがねーな」

「おい、アイン」

「何だ？ツヴァイ」

どうやら灰色の機体はアイン、水色の機体はツヴァイ、赤色の機体はドライというらしい。おそらく操縦者のコードネームだろう。

「こいつともう一匹のISを分捕ったら、他は何してもかまわねえのか？」

「ああ、作戦終了後のことは何も指示されてない」

「じゃあ、ここに居る奴等全員殺しちまってもいいんだよね？」

「ああ、問題ない」

「あ！ズルイー！！わたしもやる！！」

「いいぜドライ、分け前は半分半分だぞ」

「うん！そうと決まったら、ちゃっちゃんとアイツをぶっ殺そうよ！

「！」

（こいつら……人を殺すことをなんとも思っていないのか！？）

「おら！堕ちろ……！」

そう言つてツヴァイが肩のアーマーを此方に向ける。そこには幾つものビーム発射口が付いていた。

そこから先ほど遮断シールドを突き抜けてきたビームが発射される。

「くっ……！範囲が広い……！」

急上昇し回避する。しかしそこにドライが近接ブレードを構え向かってくる。

「堕ちちやえ……！」

「しまった……！」

ズバッ……！！

横薙ぎの一撃を避けきれずに左足を斬られる。ズキンと左足に鋭い痛みが走る。

「バリアー貫通、ダメージ87。シールドエネルギー残量、313。実体ダメージ、レベル中。大丈夫ですかマスター!？」

アリスが機体状況報告をし、此方を心配してくれるが答えを返す余裕がない。

「堕ちろ、堕ちろ♪」

ガッギンッ!!!

再びドライの振るった近接ブレードを盾で防ぐが、真下からツヴァイのビームが向かってくる。ドライを押し返し、回避するが、そこに灰色の機体の背中から放たれた5つのビットが襲い掛かる。

「くそっ!!!ビット!?!」

「わたしのドラグーンから逃げられると思うな!?!」

多角的な動きで此方に迫り、あらゆる角度からビームを撃ってくる。ビットの発射口の角度から隙間を見つけ出し、そこに機体を滑らせ回避するが……

「おらあ!!! 終りだ!!!」

回避したところにツヴァイのビーム斉射が放たれる。

「あ、エフィールド！！！！！！」

咄嗟に盾を構え、エフィールドを発生させビームを防ぐ。

バツシユウウウン！！

「エフィールドのエネルギー残量、799！」

まずい、圧倒的に不利だ。あの3機のコンビネーションには隙が無い。さつきから攻撃のタイミングを探ってはいるが見つからない。

どうする？と考えていると、突然アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「ちょっとイサム！！！！アンタ何やってんのよ！！！！そんなやつらさっさと倒しなさいよ！！！！」

中継室を見るとすすちゃんが怒っているようなあせっているような、良くわからない顔でこちらを見ていた。すすちゃんの後ろにはちねえ、一夏、セシリアさん、篝ちゃん、山田先生が見える。

（ちねえ！！！！）

「なに？あの子、うっぎ。ツヴァイ、殺っちゃってよ」

「ああ、わたしもそう思っていたところだ」

まずい！

その声に振り返るとツヴァイが肩のアーマーを中継室に向けていた。
今にもビームが発射されそうだ。

「くっそ!!ちーねえ!!!」

今からでは止められないと悟り、イグニッション・ブーストを使っ
て射線上に飛び込み、自らを盾にする。
つぎの瞬間

ドオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!

閃光に飲み込まれ、地面に墜落した。

「ガッ、ハッ!!!!!!」

背中に熱されたフライパンを打ち付けられたかのような熱さと痛み
に思わず悲鳴が漏れる、口からは吐血。内臓にきたらしい。

「シールドエネルギー残量、112!実体ダメージ、レベル高!!
マスター!!!!!!」

「ちーねえ達は!?!」

「ご無事です!」

(そうか・・・良かった)

「あはははは！！見た見た？アイツ、自分から飛び込んでいったよ！」

「今なら、楽にアイツを殺れそうだな！」

ドライとツヴァイの笑い声が聞こえる。どうやら中継室に興味は無くなったらしい。

ここで僕がやられればちーねえ達に被害が及ぶだろう。

（それだけは絶対にさせない！！約束したんだ、ちーねえを守るって！！！）

「アリス、あれを使うぞ・・・」

「ま、待ってください！！あれを今の状態で使ったら！！」

「覚悟はある。頼む。守りたい約束が・・・いや、守りたい人がいるんだ」

「・・・今のシールドエネルギー残量ですと、56秒しかもちませんよ」

「それだけあれば十分さ。やってくれ」

「・・・了解。IS-D起動します」
インフィニット・ストラトスデストロイヤー

クラス代表戦 襲撃者現る（後書き）

いかがでしたでしょうか？次回、デストロイモードでの戦闘になります。戦闘描写、大丈夫ですかね？ちょっと自信無いです・・・

今回、イサムにとっての千冬への優先度が解るようにしました。

最後の中継室のところですね。鈴が叫んだのに、千冬を見つけてからは千冬しか見えていないんです。

このことからイサムにとってちーねえは何よりも優先する人物であるということをお分かり頂けるのではなかったかと思います。

ちなみにアインはプロヴィデンス、ツヴァイはアビス、ドライはスローネアインとお考えください

次回予告

「イ、イサム・・・？」

「そんな・・・」

覚醒する神獣

「せ、センパイ・・・な、なんなんですか？あの機動性は！？あんなの普通のISには出せませんよ！」

「わたしにわかるわけが無いだろう!」

「なんなんだよ・・・なんなんだよ!?!あれは!?!く、くるなあ
あああああ!?!?!?!」

「ツヴァイ!?!くつ、速すぎる!?!?!?!」

圧倒的攻撃力と機動性

「ぐつあああああああ!」

「マスター!これ以上は!」

悲鳴の訳は・・・

次回乞うご期待!!

地図に無い基地（イレイズド）の悪夢（前書き）

今回は物凄く難産でした。

イメージはあるんだけど、上手く文章に出来ないもどかしさ・・・
自分の文才の無さが恨めしい！

自身の影響で2日ほど会社が機能していなかったので、仕事が溜まってしまい残業の日々を送っています。大変です。

次回の更新は火曜日になると思います。

地図に無い基地（イレイズド）の悪夢

イサムSIDE

「・・・了解。IS-D 起動します」
インフィニット・ストラトステスストーリーヤー

そうアリスが言った瞬間、ユニコーンの身体に変化が起きる。

全身の幾何学的な模様をした継ぎ目から赤く薄い光が灯る。その光が一本角の先端にまで行き届いた瞬間、全身の継ぎ目がスライドを始める。

足から始まり、腰、腕、シールド、肩、スライドされた装甲の下から赤いラインが露出され、体軀も一回り大きくなった。

併せて、背面に収納されていたビーム・サーベルのグリップが持ち上がり屹立する。

「よし、行くぞ！」

僕は最後まで変身が完了する前に、バックパックと脚部から露出したスラスターを白熱させ、いまだ漂う白煙を切り裂き敵に向かって突撃した。

千冬SIDE

赤いアンノウンとイサムの戦いはイサムの勝利で終わるかに見えた。しかし、爆音と共に再び遮断シールドが破られて新たに2機のアンノウンが現れ、戦闘に参加した。

「くっ！更に2機のアンノウンだと！！」

「セ、センパイ！あれではさすがのイサム君も！！」

わかっている。あの赤いアンノウンは1機で一夏と凰を圧倒するほどの戦力を有していた。恐らく、後から来た2期も同等かそれ以上の戦力を有しているだろう。それと3対1で戦おうというのだ。全盛期の私でも2機までが限界だろう。はつきり言って無理な話だ。だが・・・

「わかっている！！しかし、今現在で戦力になるような者は居ない！！」

先生方は扉がロックされているためISを取りに行くことができず、一夏と凰は機体ダメージが大きすぎて出撃できない。セシリアもISのメンテナンス中だったため、今現在ISを所持していない。

「政府からの救援は！？」

「来るには少なくとも30分ほど掛かるそうだ」

イサムが心配なのだろう。焦った顔で凰が聞いてくるが、救援の到着にはまだまだ時間が掛かる。

そんなことを言いあっている間にも戦闘は行われている。
明らかな程に劣勢。3機の連携の前にイサムは成す術が無い、一方的な展開になっている。

そして、ついにツヴァイの強力なビームがイサムを捕らえた。

それを見た瞬間、凰がピットを飛び出して行く。

「待て、凰！！何処に行くつもりだ！？」

慌ててピットを出て凰を追いかける。

後ろから、一夏、篠ノ乃、オルコット、山田先生も追いかけてきた。
凰が一つの部屋に入る。

（あそこは中継室？ま、まさか！？）

最悪の事態が頭をよぎる。

凰に続いて中継室に飛び込むが、もう既に遅かった。

「ちょっとイサム！！！！アンタ何やってんのよ！！！！そんなやつら、さっさと倒しなさいよ！！！！」

凰の声がスピーカーを通じてアリーナに響き渡る。
イサムが驚いて此方を振り向き、アンノウン達もこちらに目を向ける。

「なに？あの子、うっぎ。ツヴァイ、殺っちゃってよ」

「ああ、わたしもそう思っていたところだ」

不意に聞こえてくる会話と同時に敵が此方に狙いを定めた。

（まずい！！）

せめて生徒達だけでもと全員を押し倒し、その上に庇うようにして覆いかぶさる。

が、いつまで経っても衝撃が来ない。不思議に思い、アリーナに目を向けるとユニコーンが地面に墜落していく光景が目に見え込んだ。

（ま、まさか、私たちを庇って？）

ユニコーンが地面に叩きつけられ、白煙で何も見えなくなる。

目の前の事実が信じられなくて、口をひらけない。

「イ、イサム？」

「そんな・・・」

後ろから、凰と山田先生の声がする。しかし、そちらを振り返る気力すらない。

ガクガクツ・・・

体が勝手に震えだす。両腕で自分を抱きしめるようにするが、一向に振るえは治まらない。

悪い想像ばかりが頭に浮かんできてもうしょうもできない。

震える足で窓に近づき、いまだ白煙が漂う場所を見つめる。

「イサム・・・？・・・イサムッ!!」

そう叫んだ瞬間

ゴバツ!!!

赤い閃光が白煙を切り裂いて飛び出し、その勢いのままにドライに激突した。

ドオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

一瞬の出来事。何が起こったのかまったく見えなかった。

突然爆発音が鳴り響き、何かの残骸がバラバラと地面に落ちて行く。今までドライが浮遊していた場所にドライの姿は無く、代わりに見たことの無いISが背を向け佇んでいる。

未だに残る爆発の炎をバックにそのISが此方を振り向いた。爆発の中に映える白い身体に赤いライン、それには見覚えは無かったがその顔はユニコーンのものだった。

「ユニコーン？」

そう誰かが呟いた瞬間、その変化は始まった。

顔の両脇のユニットが半回転し、マスク部分が横にスライドし、顔の半分を覆っていた緑色のバイザーは上部に収納され、隠れていたのである。二つ眼が^{デュアル・アイ}顕わになり、最大の特徴でもあった、一本角が二つに裂けV字に展開する。

「変身した・・・？」

今までユニコーンと表されていた美しき姿はそこには無く、赤い光を纏った不気味な姿に変貌を遂げていた。

「てめえ！！よくもドライを！！！！」

唐突に仲間をやられて激昂したツヴァイが変身したユニコーンに向けてビームを放つ。

ヒュンッ

しかし、その砲撃は空をきった。

何故なら、ユニコーンが突然消えたからだ。

いや、正確に言えば消えたわけではない、速過ぎて姿が目視出来なただけだ。

赤い閃光だけがアリーナの中を縦横無尽に飛び回っている。

「せ、センパイ・・・な、なんなんですか？あの機動性は！？あんな普通のISには出せませんよ！」

「わたしにわかるわけが無いだろう！」

そのありえない程の機動性に圧倒された山田先生が質問してくるが、わたしもあんな速さのISなどみたこともないので答えられない。

その問答の間にも赤い閃光がツヴァイと接触し、両肩のアーマーを切り落としていた。

（イサム、そのISは何なんだ・・・？）

沸き起こる疑問を胸に、戦闘の続くアリーナを凝視していることしか今の私にはできなかった。

イサムSIDE

前腕部に取り付けられたビーム・サーベルをそのまま展開し、両腕の先に光刃を顕現させてツヴァイに突っ込む。

それ自体がビーム・サーベルと化した両腕を振り上げ垂直に振り下ろし両肩のアーマーを切り裂き、ツヴァイから離れる。これで砲撃の脅威は無くなる。

「なんなんだよ・・・なんなんだよ！？あれは！！く、くるなあああああ！！！！！！」

そんな叫びが聞こえてきたが、お構いなしに背後に回りこみ胴体を横一文字に切り裂いて破壊した。

「ツヴァイ！！！！くつ、速すぎる！！！！！！」

アイコンから放たれるビームを右に急旋回して回避する。

「ぐっあああああああ！」

急激なGが体を襲う。ISの操縦者保護機能が作動していない為にGが全く緩和されていない。普通の人間なら一瞬で潰れてしまうほどのGだ。強化されている為に何とかこの程度で済んでいる。早く決めなくては此方が危ない。

「あの外見、圧倒的機動性と攻撃力、3年前に報告のあったISと同じ！まさか、地図に無い基地イレイストの悪夢だということのか！！」

不意に、ハイパーセンサーが敵の叫びを拾い取る。

3年前、地図に無い基地イレイスト、その単語に思い当たる節があった。3年前にアメリカで起きたIS強奪事件、ある組織がアメリカの試作機計4機を強奪し逃走しようとした事件だ。僕はその事件の解決に大きく関わっていた。

「お前らはあの時の組織か！」

「やはり、貴様が地図に無い基地イレイストの悪夢か！！貴様のそのIS、私が貰い受ける！！行け、ドラグーン！！」

9つのビットが命令を受けて多角的な動きで此方に向かってくる。

即座に機体を急加速させビットとの距離を開き、ビーム・マグナム

をコールしビットの軌道を見切り撃つ。

直撃を受けて5つのビットが爆発四散する。

その間に後ろに回りこんだ2つのビットが放つビームを回避し、振り返りざまに左右の腕を振って切り裂く。

残り2つのビットが上下から挟み撃つように動く。

それを、ギリギリで回避し両肩のビーム・サーベルを展開して投げる。

光刃に貫かれ最後の2つのビットも爆散し衝撃波を四方に飛ばした。

「バカな!？」

アインの驚愕の声が響く。これであとは本体を破壊するだけだ。

「マスター!これ以上は!！」

突然のアリスの警告。目の前に表示されたウィンドウを見ると残り時間が5秒をきっている。

ぐずぐずしている時間は無い。

「一気に決める!!イグニッション・ブースト!！」

イグニッション・ブーストを使用して一気に距離をつめる。今までとは比較にならない速度。すさまじいGに体が押しつぶされそうに

それと同時にISの展開が解除され、僕は宙に放り出され20メートル下の地面へと落下していった。

ドサッ！！！！

背中から鈍い痛みが上ってくるが、うめき声を上げることすらできない。

「イサムッ！！」

誰かが僕の名前を叫びながら此方に向かって走ってくる音が聞こえる。

誰かが僕の頭を抱き上げる。

やわらかい感触・・・そして甘い匂い・・・いつも嗅いでいる匂いだ・・・

「イサム、イサム、イサム．．．．．」

何回も僕の名前を呟いている．．．．．

ポトツ．．．

何か冷たいものが頬に落ちる感触．．

何回も、何回も．．．．．

これは、涙．．．．．？

「ばかもの．．．お前は大ばかものだ．．．こんなにボロボロになつてまで．．．．．」

ぎゅっと、頭を抱く力が強くなった。

「でも、嬉しかったよ、守ってくれて。・・・ありがとう、イサム」

ちゅっと、額に柔らかくて湿ったものが押し付けられた

いまのは・・・なに・・・？

今の葉は何かと氣力を振り絞り目を開けると、目に涙を溜めながら此方を見て微笑んでいるちーねえの顔がうつすらと見えた。

ああ、泣いてる顔も綺麗だ・・・

そんなことを思いながら、僕の意識は深い闇へと沈んでいった

地図に無い基地（イレイズド）の悪夢（後書き）

一夏は馬鹿者で、イサムはばかもの、ひらがなで少し柔らかい感じにしてみました。

地図に無い基地イレイズドの話は後々でイサムの回想として出てきます。けっこう後になります。

次回予告

知らない天井

「あれ、ここは・・・？」

「気がついたか」

明かされるデストロイモードの秘密

「IS・Dは全てのISの破壊を目的に作られたものなんだ」

「全てのISの破壊だと？」

ちーねえとの同棲？生活での日常

「ふみゆ……朝？」

「そ、そうだ！早く起きろ！！」

ちーねえの服選び

「うーん……しっかりとした感じのも良いんだけど、ちーねえって可愛い感じのも似合うと思うよ。これなんかどうかな？」

「一応着てはみたんだが……どうだ？」

「うん。良いと思うな。すごく似合ってる。可愛いよ」

「そ、そうか？ならこれを買っていいこつ」

2人の転校生

次回乞うご期待

心の泉で（前書き）

すみません！

前回、予告した内容とぜんぜん違います。いざ、執筆しようと思ったら変なアイデアが浮かんできたのでそのまま書いてしまいました。この後の話への伏線？が少しはいつています。

前回の予告の内容は次回の更新で出します。次回の更新は恐らく金曜日です。

心の泉で

イサムSIDE

『~~~~~』

（ここは・・・心の泉か）

気がつくと思知った場所に立っていた。

あたり一面澄んだ綺麗な水、それが足裏を濡らす程度の浅さで続いている。

僕は七分袖の白いＴシャツに膝下くらいの黒い半ズボンという格好で裸足。

ここは心象世界、僕の心の中だと聞いている、心象世界だと言いくいので心の泉という名前をつけた。

とある日から突然此処に来るようになった。

それ以来、結構な頻度で此処に来ている。

『~~~~~』

不意に歌が聞こえてきた

とても綺麗でやさしい声

この場所に来るたびに聞いている歌声

彼女だ

歌声のするほうへ足を進める。

パシャパシャ

パシャパシャと

歩くたびに足下の水が跳ね心地よい音を立てる

『長弓背負いし 月の精』

『夢の中より 待ちをりぬ』

『今宵やなぐゐ、月夜見囃子』

『早く来んかと 待ちをりぬ』

『眠りたまふ、ぬくと丸みて』

『眠りたまふ、母に抱かれて』

彼女はいつもの場所に居た。

心の泉の中心、この綺麗な水が湧き出るところ

腰元まで届く眩い程に輝く純白の髪

聖母マリアを想起させる全てを包み込む柔らかい笑顔

白い可愛らしいワンピースに身を包んでいる

彼女は美しい髪を風に揺らしながら、目を閉じて歌っている。

僕は声をかけることはせずにその歌声に耳を澄ませる

懐かしい歌

母が僕のために作ってくれた、世界でたった一つの僕だけの子守唄

『真櫂掲げし 水の精』

『夢の中より 待ちをりぬ』

『今宵とりふね、うずまき鬼』

『早く来んかと待ちをりぬ』

『眠りたまふ、ゆるゆる揺られ』

『眠りたまふ、海に抱かれて』

歌が終わり、彼女の目が開かれ僕を捕らえる

「こんにちは、マスター」

「・・・ここではマスターは無しだって言っただろう？」

「ふふっ、そうでしたね。では改めて・・・こんにちは、イサム」

「こんにちは、アリス」

挨拶を交わしお互いに微笑み合う

「どうでしたか？わたしの『月と海の子守唄』は」

「良かったよ、凄く。懐かしかった」

「ふふっ、なら良かったです。月海つぐみさんのご教授のおかげですね」

「母さん、歌うまかったからね」

「ええ、私の憧れです」

そう言つてアリスは懐かしむように目を閉じる。それと同時にアリスの感情が僕に流れてくる。

どこからともなく吹く風が優しくアリスの髪を躍らせる。

（綺麗だな・・・）

素直にそう感じた。ちーねえも綺麗だが負けず劣らず、アリスも綺麗だ。

ちーねえはどちらかと言うと凜々しい感じで、アリスは美しいって感じた。

「綺麗だなんて・・・ふふっ、嬉しいです」

忘れてた。此处、心の泉では聞く本人が望めば相手の考えたことや思ったことも伝わるんだった。

「もしかして、僕の思考ってダダ漏れ？」

「はい♪千冬さんも綺麗だけど私も綺麗だって♪」

さっきのも聞かれていたらしい。小悪魔的な笑みを浮かべて笑っている

「はあ、僕の思考覗いて楽しい？」

「楽しいとかではありません。ただイサムの思っていること、考えることを全部知りたいだけです。ここでしか会うことはできませんから、せめて此处でだけはイサムの全てを知っておきたいんです」

そう言ってアリスはとてつもなく可愛らしい笑みを僕に向けた

（う、うわ、その笑顔は反則・・・／／／）

顔が一気に熱くなつていくのが解る。

僕だって男だから綺麗な人にこんな笑顔をむけられたら照れてしまふのは当たり前だ。

「ふふふつ、顔がものすごく赤いですよ？どうかしましたか？」

「アリス・・・君、解つてて聞いているでしょ？」

「ええ、もちろん♪イサムの口から聞きたいですから♪」

「はぁ・・・」

「ほら！言つてください！どうしたんですか？」

アリスが物凄く期待した目で聞いてくる。そんな目をされたら言うしかないじゃないか・・・これも計算のうちなのだろうか？
だとしたら、アリス、なんて恐ろしい子。

何だか一生アリスには勝てない気がしてきた。

「・・・」

「イサム、聞こえませんか？」

「か、かわ・・・・・・・・かわ・・・・」

「かわ、何です？」

「か、可愛かったから、照れてました！！」

・・・・・・・・言ってしまったよ。どうもアリスのペースに乗せられてしまう。こんなの僕のキャラじゃない・・・・

「千冬さんよりもですか？」

「うっ・・・・・・・・いや、それは・・・・」

「マリアさんよりも？」

「い、いや・・・・・・・・その・・・・・・・・」

（ど、どう答えれば良いんだ???　ちーねえは可愛い、マリアも

同じくらい可愛いし、アリスも同等に可愛いし………)

「ふふっ、ふふふっ」

不意に含み笑いが聞こえてきた。見るとアリスが口を押さえて必死に笑いを堪えている。
僕で遊んでいたな……

「はぁ………楽しい？」

「ふふっ、ごめんなさいイサム。怒らないで」

「別に……怒ってなんていない」

抗議の意味も込めて少し不貞腐れた声色で返す。

「なら、良いです。……それよりもそろそろ時間では？」

強引に話を摩り替えられた、ずるい。
でも、確かにそろそろ朝になる時間だ。もう少し居たいけど、目覚めないとちーねえが心配する。

「そうだね。名残惜しいけど行くよ」

「ええ、また此处でお会いしましょう」

そう言葉を交わした瞬間、光が視界一面に広がり心の泉は消えていった

番外編 次話でイサムが目覚めた後

アリスSIDE

「この間のマスター、可愛かったですよ」

「・・・そんなこと言われて嬉しい高校男子はいないよ」

「顔、赤いですよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ふふっ、そういうところ可愛いです」

「むむっ・・・アリスも凄く可愛いよ!特にこの間の笑顔は天使に
みえた!」

「ふふっ、好きな人にそう言ってもらえるのは嬉しいです」

「／／／／．．．す、好き！？．．．いや、真に受けるな．．．
いつもの冗談だね、解っているよ！」

（ほんとのことですよ．．．あなたは私に兵器としての名前捨てさせ、人としての名前を与え、ISとしてではなく一人の女性として扱ってくれたのですから．．．．．）

「ガンダム？そんな、兵器みたいな名前は捨てちゃいなよ．．．
うゝん、そうだな．．．君の名前はアリス。君の名前は今日からアリスね」

「アリス．．．わたしの名前？」

「うん、そう。アリス、君の雰囲気ぴったりだと思う。ガンダム

なんてゴツゴツしてそうでぜんぜん君にあってないからね」

「アリス・・・アリス・・・アリス・・・私の名前はアリス」

「そう、これからよろしく、アリス」

「あ、はい、マスター」

「ダメだよ。此処は僕たち二人だけなんだから名前で呼んで？」

「は、はい・・・では、よろしくお願いします、イサム」

（嬉しかったです。一瞬で貴方のことが好きになりました。最初はこの思いが好きという感情だとは、わかりませんでしたけどね。まさか恋までできるとは・・・思ってもいませんでしたから。この思いが叶うことは無いでしょうが、心の泉の中だけでは私だけのイサムでいてくださいね・・・）

心の泉で（後書き）

今回、アリスが歌っていた子守唄はEVER17というゲームから出させていただきました。

月海さんの作った子守唄だから『月と海の子守唄』です。

実はこれ上記のゲームのサントラにも入っていない曲なので、聞きたい方はゲームを買っていただくしかないかと・・・

もしかしたらニコ動とかにあるかもしれません

では次回もよろしく願いします。

IS・Dの秘密と千冬の日常（前書き）

なるほど！インフルエンザとはこういうものか！！

はい、作者です。季節はずれのインフルエンザにかかっていました。インフルエンザ、19年の人生で初めてかかりました。

おかげで約束の金曜日に更新できなかった・・・

オ・ノオオオオオーレー

今、作者はちよつとした悩みを抱えています。

それは・・・

箒ちゃんとシャルロットが可愛すぎて一夏に渡したくないみたいな・・・

シャルはこれからだから幾らでも修正可能なんですけど、箒が・・・もはや修正不可能だよ

ああ、どうしよう

追記

IS・Dの説明がダブっているというご指摘があり修正しました。申し訳ありませんでした。

IS・Dの秘密と千冬の日常

イサムSIDE

「うあ……………」

目を覚ますと白い天井が見えた。今までの状況と独特な薬品の匂いからして、ここは保健室だろう。

「くつ……………いったあ……………」

体を起こそうと力を入れるが、体中の筋肉が悲鳴をあげる。あまりの痛さに起き上がれない。

仕方が無いので再びベッドに横になったところであることに気が付いた。

誰かがベッドにしな垂れて眠っているのだ。耳を澄ますと、スースーと規則正しい寝息が聞こえる。

誰だろう？と目を向けると、そこには

「ちーねえ……………」

ベッドに頭と腕だけを乗せて、頭を枕がわりの腕の上にのせて眠っ

ている。

ずっとそばに居てくれたのだろうか？

そう考えるとなんとなくこそばゆい気持ちになる。それに耐え切れなくて、右腕を何とか動かして頭を優しく撫でてみた。

さわさわ・・・・・・・・さわさわ・・・・・・・・

何だか心地が良い。胸の奥がふんわりする感じとでも表現すれば良いのだろうか？とにかく、心が温かくなってくる

「うん・・・・・・・・・・？」

頭を撫で続けていたらちーねえが起きはじめた。
悪いことしちゃったかな？

「おはよう、ちーねえ」

「ん・・・・・・・・・・？・・・・・・・・イサム、気が付いたのか！？」

「おかげさまで」

「いや、私はただそばでお前を見ていただけだ」

「それでも、目が覚めた時にそばに誰か居るか、居ないかでは精神面で大きく違うよ」

「そういうものなのか？まあ、役に立てたのであればそれで良い」

「・・・そろそろ本題に入るか。あれは何だ？」

ちーねえの口調が真剣なものに変わる。質問された内容は予想通りのものだ。いつかは話さなければならぬことだし話しても問題は無いだろう。意を決して口を開く。

「あれはIS-Dシステム、正式名称はInfinite Stratos Destroyer。インフィニット・ストラトシステムロイヤユニコーンの真の姿。覚醒した神獣、可能性の獣、大いなる使命を背負いしもの、女尊男卑の時代への反抗の象徴となるべきだったもの」

「IS-Dは全てのISの破壊を目的に作られたものなんだ」

「全てのISの破壊だと？」

「そう、僕の両親がISの開発に携わっていたのは話したよね」

「ああ」

「僕の両親と束さんは試行錯誤を繰り返しIsをこの世界に生み出した。だけどひとつの大きな問題点が浮き彫りになった。それは」

「Isが女性にしか使えないということだな？」

「そのとおり。これは大きな誤算だった。人類の宇宙進出の希望と

なるはずだったものが性別差別を生み出すものになってしまったからだ。結果、世界は女尊男卑の世界へと変貌を遂げた。ある者は腕が当たったというだけで収容所に送られ、ある者は奴隷のように扱われた。

それまで空軍に所属し数々の功績を挙げて、英雄と呼ばれてきた戦闘機パイロット達は翼をもがれ、空を奪われ地面に這いつくばされた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして、もう一つの問題が発生した。東さんの自己満足によってISの兵器としての価値の凄さが世界に露呈された。それを受け、各国はISを兵器として運用し始めた」

「・・・・・・・・それで？」

「僕の両親はそれが許せなかった。人々を新たなステージへと導くはずだったものが世界を歪ませているんだからね。されにはISを用いた戦争やテロが起きる可能性まで出てきてしまった。この二つをどうすれば無くすことが出来るか？答えは簡単だ。・・・・すべてのISが消え去れば良い。幸い二人にはISに乗るために強化を施し、常人離れた身体能力と特殊能力を開花させた息子がいた。あとは男が使えるISを開発するだけ。そうして開発されたのが・・・・ガンダム」

「ガンダム？ お前のISはアリスでは無いのか？」

「アリスは僕が付けた名前だから。正式名称はGeneral purpose Utility Non-Discontinuity Augmentation Maneuvering weapon system」（全領域汎用連続増強機動兵器）この頭文字を取ってGundam。^{ガンダム}この名前は嫌いだからアリスで説明していくよ。アリスは言わばISを駆逐するISとして開発された。ISを全て破壊するためにはそれなりの性能が必要。だけど、生半可な性能ではすぐに追いつかれてしまう。ただ攻撃力や防御力を挙げただけでは意味が無い、技量があれば勝てるからね。ならどうすれば良いのか、答えは簡単。ISですら捕えられない圧倒的機動力で相手を翻弄し、圧倒的攻撃力で一撃で破壊する」

「たしかに、それならば相手が何であろうと倒せるな」

「だけど、それを実現するには機体の追従性と超高速戦闘下でも相手を捕らえ続けるセンサーが必要だ。それを解決したのがサイコフレームと呼ばれる人の思惟を受信する作用があるフレーム。これを全身にめぐらせることで操縦者の意思をいち早く機体に反映させ追従性を上げ、相手の思惟や悪意、邪気といったものを受信することで相手の居場所を特定し、行動を予測したりできるようにした。以上のフルサイコフレームと呼ばれる技術で圧倒的機動力での戦闘を可能にしたユニコーンのオペレーションシステム総称をIS-D

システムと呼ぶようになった」

「まさに Infinite Stratos Destroyer
インフィニット・ストラトステストロイヤー
といったところだな。ISは必ず人間が操縦する。まあ今回の例
外だったが。人間が操縦するということは必ず何かしらの思惟が出
る。それを感知し居場所を特定、圧倒的機動力で攻撃を寄せ付けず
圧倒的攻撃力で一撃で破壊。ISではまず勝ち目が無いな。」

「でも、操縦者はそれ相応のリスクを負うことになる」

「・・・臓器損傷はその所為か」

「そう。IS-D発動時の機動力の源はシールドエネルギー。そし
て、攻撃力の源は操縦者保護機能を停止させることによって生まれ
たエネルギーなんだ。それがどういうことか解るよね？」

「制限時間がある。耐G負荷軽減が発動しない為、生じたGの全て
を自身の身体に受ける」

「そういうこと。身体強化されているけど、あのGは結構キツイん
だよ。制限時間は1秒ごとに2のシールドエネルギーを変換するか
ら最大で5分だし。だから、滅多なことでもない限り使わないよう
にしているんだ」

「それが良いだろう。話を聞く限りIS・Dシステムは危険だ。今後、学園内での使用は禁止する。良いな？」

「問題無いよ。使うつもりも無いし」

「そうか。私は今回の事件の報告をしなければならぬからもう行くぞ。お前はまだ休んでおけ」

「了解」

ちーねえは返事を聞くと早々に立ち去っていった。保健室が再び静寂に包まれる。

誰かが来る気配も無いことから恐らくいまだに面会謝絶になっているんだろう。

「もう一眠りするか。そうすれば明日には体の痛みも取れるはずだ」

もう一度眠りにつくために目を閉じる。やがてやってきた睡魔に逆らうことなく僕は意識を手放した。

千冬SIDE

あの事件から一週間がたった。イサムは驚異的なスピードで回復し既に通常通りの生活を送っている。

医学者によると免疫機能並びに代謝効率が著しく能力向上しており、肉体再生能力が常人の20倍の域に達しているらしい。恐らく、身体強化の副作用だろう。ともあれ大事にならなかったことは非常に喜ばしいことだ。

さて、今私が何をしているのかというと・・・イサムの寝顔を見ている。

普段の大人びた表情からは想像できない程のあどけない顔で眠っている。この部屋で一緒に生活するようになってから毎日見ているが、何度見ても飽きない。この寝顔を独占していると思うと凄く胸が温かくなる。他の女には絶対にみせたくないものだ。

このままずっと眺めていたい今日は平日なのでそうもいかない。嫌々ながらも起こしに掛かることにした。イサムは朝に弱いので起こすのは私の日課のようなものになっている。

「イサム？・・・起きろ、イサム」

肩に手を置き軽くゆすりながら声を掛けるが起きる気配が無い。普段であればこれで大体起きるのだが今日は眠りが深いらしい。

「朝だ、起きろイサム。」

さつきより気持ち強めに肩をゆすりながら再び声を掛けるとうつすらと瞼が開く。

「ふみゆ・・・・・・・・朝？」

「そ、そうだ！早く起きろ！！」

いきなり小首を傾げて聞いてきたものだから焦ってしまった。何故って・・・・可愛すぎるからだ。いくら毎日のことで耐性が出来るからといって、いきなりアレは反則だ。私以外が見たら鼻血を吹き出したとしてもおかしくはない。

「ほら、体を起こせ。食堂に行くぞ」

「・・・・・・・・あい」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

私の言葉にコクンと首を縦に振りながら答える姿にまたしても焦ってしまふ。

そんな私を尻目にイサムは着々と準備を進めている。歯を磨き、顔を洗って制服に着替える。

目はまだ半開きだ。イサムの朝の弱さは折り紙つきで、起きてから30分はまともに行動できない。

現に今も制服をパジャマの上から着ようとしている。

「おい、イサム！パジャマを脱げ！」

「うみゅ？ぱじゃま・・・？」

コテンとまた首を傾げる。仕方が無いので制服をきるのを手伝ってあげる。もう手馴れたものだ。

「まったく、お前の朝の弱さは如何にかならないのか？」

「?????????ごめんにやしい??」

首を傾げて謝ってくる。思わず抱きしめそうになるが何とか理性で押さえ込む。

心頭滅却すれば火もまた涼し！

落ち着けよ、私！

必死に欲望を押さえ込み何とか着替えを終わらせて食堂に向かう。道中はイサムの手を引きながら歩く。こうしないといつの間にか何処かに行ったり、廊下でへたれこんで寝てしまったりするからだ。

イサムはふらふらと為されるがままに着いてくる。

食堂に着き、おばさんに二人分の食券をわたす。頼んだのは何時も通りの洋食セット。内容はトーストとスクランブルエッグ、厚みのあるベーコンにサラダとコーンスープ付だ。

「はいよ。うふふっ、何時も仲が良いねお二人さん」

「か、からかわないください／＼」

「いやいや、本当のことよ」

おばさんから料理を受け取り、逃げるように席に着く。

この時間帯は私たち以外は来ない。食堂が開いていないからだ。おばさんに頼んで私たちだけはこの時間に利用できるようにしたのだ。これなら安心して二人で食事が出る。

「いただきます」

「・・・いただきます」

ガブリとトーストに噛り付く。続いてスクランブルエッグを口に入る。相変わらずこの食堂の料理は美味しい。こんなものを学生に食べさせて良いのだろうか？

次々と料理が皿から消えていき、20分程で食べ終わる。色々といサムと話しながら食べたいのだが今のイサムに話しかけてもまともな答えは返ってこない。

なので、何時も通りイサムが食事を取っている姿を眺める

もふもふ・・・もふもふ・・・

リスのようにトーストを両手で持ちチビチビと齧る。ものすごく癒される。

馬鹿共の相手でたまっていた疲れが一気に吹き飛ぶのがわかる。

しばらく眺めているとだんだんと目が開かれてきた。どうやらお目

覚めのようだ。

「おはよう、イサム」

「おはよう、ちーねえ。また迷惑かけちゃったね」

「別に何時ものことだ。気にするな。．．．．．これは、私の
楽しみの一つだからな」

「ごめん。最後のほうがよく聞こえなかったんだけど」

「き、気にするな／＼それよりもそろそろ行くぞ」

そう言い残し早々に食堂を出る。
後ろからイサムが追いかけてくるのが聞こえる。

さて、今日も一日頑張るか

IS・Dの秘密と千冬の日常（後書き）

うーん、篝ちゃんとシャルどうしよう・・・

誰か殴ってストーリーを修正して

「そんなストーリー修正してやる！！！！」

「これが若さか・・・」

話全然違っけどカミューってカッコイイよね。

ジージェネワールドのカミュー強すぎ。固有アビリティの星を継ぐ者が強すぎる。

流石、最強のニュータイプ

お買い物！これはデートですか？ 2人の転校生 駆け抜ける嵐（前書き）

更新します。

いつの間にかPVが15万を超えていました。ありがとうございます。

お買い物！これはデートですか？ 2人の転校生 駆け抜ける嵐

イサムSIDE

「今日一日、私に付き合え。拒否権は無い」

朝、開口一番にちーねえにそう言われた。僕としては断る理由も無いのでわかったと軽く返事をしたんだが。

はあ・・・なんでこうなった・・・？

「おい、何をしている。早く入るぞ」

「入るぞって、此処ランジェリーショップだよね？」

そう、僕とちーねえはランジェリーショップの前で押し問答している。何てシユールな光景だ・・・

こんな女性の下着しか売ってないところに男が入ったら、獣を見るかのような視線で針のむしろにされるのは眼に見えている。それくらいならまだ良いだろう。最悪、問答無用で警察を呼ばれて連衡されてしまう。

「何を当たり前のことを聞いている。ほら、行くぞ」

そう言っ僕腕引張っ中に入ろとする。

「ちょ、ちょっと引張らないで。イタイ、イタイ」

「嘘を付くな。これぐらいで痛いわけが無いだろう」

そして、遂に僕はランジェリーショップの中へと足を踏み入れてしまった。

足を踏み入れた瞬間、早速奇異の視線が僕を射抜く。

「ち、ちーねえ、早くして。視線が痛い」

「堂々としている。別にお前は下着を見て喜ぶような変態という訳ではないだろう」

うう・・・鬼だ、鬼が居る・・・

「何か言ったか？」

「別に何も・・・」

意気消沈している僕を尻目にちーねえは奥に進んでいく。僕も周りを見ないように下を向いてついて行く。

スタスタ

とぼとぼ

女性客とすれ違う度に凄い視線が突き刺さるのを感じる。

（ああ、軽く返事するんじゃないかった。これは恥ずかしすぎる・・・）

「・・・い・・・お・・・イサム！」

「うわっ！ーな、なに」

「なに？じゃないだろう。何をボーっとしている」

「いっ、いっめえ」

「・・・まあ、良い。それで、これなんだがどう思う」

そう言つてちーねえが突きつけてきたのは黒いブラジャーとパンツのセット。豪華なレースの装飾があらわれていて如何にも大人向けな感じだ。

これを付けたちーねえを想像してみる・・・って何を想像しているんだ僕は！！

落ち着け、落ち着くんた。想像するな、感じるんだ。

方程式その1　ちーねえ×黒〓最強　みたいな

「こ、この上なくお似合いだと思います！！」

「ふむ、ではこれは買うことにしよう」

あとは・・・と、ちーねえは再び下着選びに戻る。

僕はというとさっきの想像を必死に思考の外へと追い出している。顔が凄く熱い、きつと凄く赤くなっている。

「なあ、何色が似合うと思う？」

「へ！？」

唐突に質問されたが意味がわからずに変な声を上げてしまった。

「下着の色だ。何色が似合うと思う？」

ああ、なるほど……って、そういうことを普通男に聞くかな？
それって好みを言えって言っているようなものじゃない。でも、答えないといつまでたつても出られないし。適当に答えたら、後が怖いしな……まじめに考えよう。

（うーん、黒以外で似合う色……ピンク、白、クリーム……
・パープルとか赤も似合いそうだな。でも、ここは……）

「個人的にピンク……」

「ピンクか。なら、これなんか良いかもしれんな。試着してくれるから少し待っている」

「え！？ちよ、ま……行っちゃったよ……」

まずい、これは非常にまずい。こんなところに男一人で取り残されたら……ちーねえ、ハリーハリーハリー。

「そのあなた」

「はい？」

ああ、やっぱり思いながらとりあえず返事をし、声をかけた相手のほうを向く。

「あら、可愛い子。ふふつ、気が変わったわ。あなた、わたしの男になちなさい」

いきなりだ。だが、珍しいことではない。女尊男卑の世界になり、何処の国にも女性優遇制度が設けられた。その結果、男は街を歩いているだけでも、このように女から命令される始末。断ろうものなら難癖をつけられて警察に捕まり裁判沙汰になる。裁判員も女性の方が多く発言権も強いので裁判になったが最後、問答無用で有罪確定だ。

だけど僕は・・・

「ふざけるな。何故僕がお前のような下品な女の男にならなければならぬ。寝言は寝て言え」

僕はそんなものには屈しない。女尊男卑の世界への反抗の象徴であるアリスの操縦者である僕はそんなものには絶対に屈しない。

「な！？下品ですって！！自分の立場をわかっていないようね。男が女に逆らってんじゃないわよ！！」

「立場？お前の方こそ自分の立場をわきまえる。女性が優遇されているのは、ISを操縦できる女性がいるからだ。ISを操縦できないお前が偉そうにするな」

「くっ！・・・良いでしょう。あなたに自分の立場を教えてあげるわ！！」

そう言つて女性客は警備員を呼びに行こうときびすを返す。そこに・

「貴様・・・わたしの連れに何をしている」

阿修羅と化したちーねえの聲がかかった。みるからに怒ってるで敵を見るかのような厳しく鋭い視線で下品女を睨みつけている。

「あ、あなたの男なの？し、賤ぐらいしっかりなさったらどうです

か？」

「黙れ。今すぐ此処から消えろ」

「な！？あ、あなた」

「もう一度だけ言う、黙れ。そして此処から消えろ。出来ないのであれば私が力づくで消してやる」

「！！」

ちーねえから発されているさつきを感じ取ったのだろう。下品女はその場にへたれ込み失禁している。
流石に可哀想なのでちーねえを止めるとしよう。

「ちーねえ、僕は気にしてないからさ。そろそろ殺気を押さえようよ」

「……………わかった。精算を済ませて次に行くか」

下品女はそのままにさっさとレジに向かう。やっと此処から抜け出せるよ。

「次はどこに行くの？」

「ああ、ショッピングモールに行こうと思っている」

ショッピングモール『レゾナンス』、駅舎と合体したこれは食事は和・洋・中を問わずに完備。衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。その他にも各種レジャーはぬかりなく、子供からお年寄りまで幅広く対応可能、と言った施設だ。

「じゃあ、行こうか。手、繋ごうよ」

はぐれないようにと手を差し出す。

「・・・・・・・・・・はあ、お前も一夏に負けず劣らず・・・」

手を取ったあとため息を付いて、何かブツブツ言っているけど・・・
・気にしなくていいか

「来たは良いけど何を買うの？」

「ああ、夏物の洋服を買おうと思っている」

「洋服だと3階だったね」

「そうだな。行くぞ」

そう言って、僕の腕を引っ張っていった。

3階 洋服売り場

「これなんかどうだ？」

ちーねえが見せてきたのは薄手の黒いテーラードジャケット。似合う。似合うんだけど、今回は少し趣旨を変えたものを買ったほうが良いんじゃないかと思う。

「うーん・・・しつかりとした感じのも良いんだけど、ちーねえって可愛い感じのも似合うと思うよ。これなんかどうかな？」

近くにあった白いワンピースと黒いカーディガンを渡す。ワンピースはところどころにフリルの施されている可愛い感じのやつだ。

「とりあえず、試着してみるか。悪いがまた少し待っててくれ」

「りょーかい」

女性の買い物って大変だね。男ならその場でサイズ合わせれば良いから早く終わるけど。

「一応着てはみたんだが・・・どうだ？」

試着室から出てきたちーねえが尋ねる。

うん。僕のコーディネートに狂いは無かった。

「うん。良いと思うな。すごく似合ってる。可愛いよ」

「そ、そうか？ならこれを買っていいこつ」

顔を赤くして照れてる。うん、こついうところが可愛いんだよね。

それから、しばらく洋服を見て周り夕飯の話題になった。

「そういえば、昼ごはん食べ損ねちゃったね」

「買い物に夢中になりすぎたな」

「うん、時間忘れてたよ。夕飯はどうする？外で食べて帰る？」

「久しぶりにお前の作ったカレーが食べたいな・・・ダメか？」

「いや、構わないよ。じゃあ、食品売り場に行こうか」

1階食品売り場

「とりあえず、豚肉の三枚肉、トマト、トマト水煮缶、たまねぎ、ニンニク、生姜、チャツネ、ココナッツミルク、オリーブオイルを買わなきゃ」

「豚肉は、うーん・・・これが良いかな」

「トマトは色が鮮やかなものを・・・水煮缶は何でも良いや」

「たまねぎは実が小ぶりなものと」

「ニンニク、生姜、これは見分け方がわかん」

「チャツネとココナッツミルクあるってどんだけ品揃え良いのよ、この店」

「オリーブオイル！勿論エキストラヴァージン！！」

次はスパイスだね。スパイス売り場に行こう。

「ターメリック、クミンパウダー、コリアンダー、チンピ、フェネグリーク、フェンネル、シナモン、カエンペッパー、ガーリックグランチュー、ジンジャー、デイルパウダー、オールスパイス、カルダモン、クローブス、スターアニス、セイジ、タイム、ナツメグ、ブラックペッパー、ベイリーブス。

すごい！全部あるとは思ってなかった！！」

「それで、終わりか？」

「うん！早速帰って準備しないと！！」

ちーねえの手を取り、足早に学園へのみちを歩いていく。
よし、久々だし今日は張り切っちゃうよ！

ちーねえの部屋についてすぐに準備を始める。ちーねえは山田先生に呼ばれて職員室に行っている。何でも明日、クラスに2人転校生が来るらしくその手続きだそうだ。

「よし、調理開始だー!!」

まずはカレー粉。

さっき買ってきたスパイスをボウルにあけ、軽く混ぜ合わせる。
それをフライパンで弱火で焦さないように5分ほど炒めて火からおろして冷ます。

次、カレーに入れる具。

玉ねぎ、シウガ、ニンニクをそれぞれみじん切りに、トマトはへたを取って6つ切りにする。
豚三枚肉は食べやすい大きさに切り、塩コショウを振りかけてしば

らく置いておく。

鍋にオリーブオイル、ニンニク、ショウガを炒め香りが出てきたら、玉ねぎのみじん切りを入れ弱火で220分炒める。弱火じゃないとたまねぎが苦くなるので注意だ。

次に豚肉を加えて5分ほど炒めたら、カレー粉の約3分の2を加えて更に2分ほど炒めてからトマト缶を加える。

いよいよ最終段階だ。

ココナッツミルク、水、チャツネ、ベイリーフを加えて、蓋をして弱火で1時間ほど煮込む。時々アクを取り除くのを忘れずにと。アクは取りすぎてもダメ、取らなすぎてもダメ、程よくだ。

1時間ほど煮込んだら6つ切りにしたトマトを加えて、さらに10分ほど煮る。最後にのカレー粉を加えて、混ぜ合わせたら出来上がりだ。

うん、いい匂い。ご飯も炊けてるし、後はちーねえが帰ってくるのを待つだけだ。

・・・・・・・・それからしばらくの時間が経って・・・・・・・・

「すまない。会議が長引いてな」

「いやいや、気にしてないよ。お疲れ様」

「ああ、ありがとう。いい匂いだな」

「トマトポークカレーにしたんだ。今、準備するから待ってて」

お皿にご飯をよそい、カレーをかけて机に持っていき並べる。

「「いただきます」」

2人揃ってそう言い、同時にカレーを口に含む。

「ふむ、相変わらずうまいな」

「お褒めいただき恐悦至極」

どうやら口に合ったようだ。

自分でも結構おいしく出来たとは思っていたが、実際にそう言われるとやっぱり嬉しい。

コンコン

不意にノックの音がした。こんな時間に誰だろう？と思いながらもドアを開けると一夏が居た。

「よっ！！イサム。今日はESの訓練は休みにしようと思うんだが・・・この匂い！！カレーか！？お前か！？お前が作ったのか！！って、当たり前か千冬姉は料理なんか出来ん。何故、俺を呼ばない！！久しぶりのお前のカレー、俺だって食いてえよ！！！！　お邪魔します！！！！！！」

「え！？あ、ちょ」

止める間も無く、一夏は部屋に入ってしまった。カレーにしか目が行ってないらしく、ちーねえが物凄く剣呑とした目をしているのに気が付いていない。

「ううううおおおっおおおお！！！！何だこのカレーは！？ホントに人間が作ったものか！！」

一夏、おいしいって言うてくれるのはうれしいけど、後ろ後ろ！！

「この・・・腐れ愚弟が・・・」

「え！？なに？？ちょ、ち、千冬姉、何でISブレード振り上げてんの！！！？؟؟や、やめてええええええええええええええええ！！！！」

慌てて部屋から出て行く一夏。

「待てええええええええええ、この愚弟があああああ！！！！！！！！」

一夏、君のことは忘れないよ………

その日、学校に鬼が出没したという噂が広まったらしいが本当に鬼だったかどうかは定かではない

次の日

「えーっと。それではSHRを始めます。その前に転校生を紹介します！　しかも二人です！」

女子達が騒ぎ出す前に扉が開き、その件の転校生と思われる二人の外国人が教室に入ってくる。

「失礼します」

「・・・」

二人の内の一人を見て、女子達は騒ぎ始めるのをピタリと止めた。

「え？」

「なっ!？」

「うそっ!？」

「男!？」

そう2人の内1人が男なのだ。みんなが驚くのも無理は無い。

が、僕は驚くよりも先に違和感を覚える。

何故なら、筋肉の付き方が男の物では無いからだ。それに幾等なんでも華奢すぎる。華奢な割には胸囲の部分だけは一般的な成人男性ぐらいある。

「お、男！？おいイサム、男だぜ！！」

「うん、男？だね」

一夏は気が付いてないようだな・・・

調べておく必要がある・・・

とりあえずこっちはもう良い。問題はもう1人・・・

あの銀髪の女の子から強大な憎悪の念を感じる。向けられている先は一夏。

何をやらかすか解らない。注意しておかないとな。

新たな2人のクラスメイト、だが僕は素直には喜べなかった。

一夏に害になるようであれば、僕が排除しなければならないのだから

お買い物！これはデートですか？ 2人の転校生 駆け抜ける嵐（後書き）

ちーねえとのデート？いかがだったでしょうか？

シャルとラウラも登場しました。といってもまだ自己紹介もしてないですが

次回予告

「いきなり殴ろうとするなんて、ドイツ軍ではそういうのが流行っているのかい？だったら受け取りなよ！！」

「ぐっ！？貴様！！」

一夏を守るために行動を起こす

「目的は何だ？シャルル・デュノア。いや、シャルロット・デュノアと呼んだほうが良いか？」

「え？」

「もし、一夏の害になるようなら、君を排除する。覚えておけ」

一触即発 イサムVSラウラ

「今度は貴様が相手か」

「お前、どういつつもりだ？」

「あいつらに自分の弱さを思い知らせたまでだ」

「そうか、ならお前には自分の弱さを思い知ってもらおうか」

「やってみろ」

「そう、じゃあ遠慮なく。IS-D起動」

緊急告知！！

皆さん、お久しぶりです。

この1ヶ月半ほど、いかがお過ごしでしたでしょうか？

自分は新人の教育をしたり、出張したりといろいろな大変な生活を送っていました。

まあ、でも体は健康です。

「10代は伊達じゃない！！！！」

と、ふざけたところで本題ですね。

既に感の良い方は語冊子かと思いますが、この小説の連載を停止と
いうかやめます。

理由と致しましては、メッセージや感想などでいろいろなご意見が
寄せられ、このままでは読者の皆様の期待に添えるような小説は難
しいだろうと考えたからです。

例えば

イサムと箒のカップリングをしてほしい

シャルを是非イサムのハーレムに

一夏は小説でハーレム王だからフラグは一人で良い

機体変換網力はいらないかも

などなど

はつきり言ってしまうと今更いわれても変更できない御意見が多々寄せられました。

なので、もういつそのこと新しい小説を作っちゃえ！！的なノリで新しい小説を考えましたので、そちらを投稿したいと思います。

題名は

「IS 〱空を翔る始まりと終焉の天使〱」

を予定しております。

検索して一見していただければと思います。

因みに主人公は変わりません。千冬がヒロインなのも変わりません。

あと、宣伝ですが勇介くんという作者名で

「デステイニー・ブレイカー 運命を破壊する者」

という小説も執筆しておりますので、よろしければ此方をお願いします。

予告というか何というか

かのIS、白き翼を雄雄しく羽ばたかせ空を翔る

助けを求める者をその翼で優しく包み・・・

弱き者に害為す強者をことごとく破壊する・・・

それはISの始まりのISにして、全てのISに終焉をもたらすIS

その名は・・・

「ウィングゼロ・ファイナル」

ご期待ください！

お知らせです

皆さん、お久しぶりです。

活動再開の目処が立ちましたので報告させていただきます。

仕事の方で急に海外へ長期出張してしまっただため小説の執筆を断念せざるを得ない状況でした。パソコンも3・11の自身により壊れたため、会社より支給された仕事用のパソコンしかなくどうしても再開の目処がたちませんでした。

しかし、つい先週ようやく日本に帰国しパソコンの方も新たに購入することが出来ましたので、徐々にですが執筆を再開したいと考えています。

つきましては皆さんのご意見をいただきたいと思います。

執筆停止中である

IS 蒼空を駆ける者たち
デステイニー・ブレイカー

のどちらかを執筆再開するか

新たに作成中の以下3作品のうち1作品を執筆するかです

1・仮面ライダー響鬼 最後の戦鬼

2・仮面ライダー555 紅き閃光の記憶

3・機動戦士ガンダムUC THE ANOTHER

1は響鬼本編から28年後のお話です。

時代が進むに連れやがて鬼を受け継ぐものは少なくなっていくた・
・

明日夢の弟子にして最後の鬼の継承者となった少年と少女が会
時、新たな物語が紡がれる・・・

「それは、まあ鍛えてるからね」

2は555の主人公差し替えの小説です。

もしも巧と同じ人生をまだ17歳の少年が歩んだらというお話です。
夢が無い少年が出会ったのは一人の女性、そこから止まっていた歯
車がゆつくりと動き始めた・・・

「例え僕自身に夢が無くても・・・誰かの夢を守ることはできる」

3はガンダムUCの主人公差し替え小説です。

ヒロインはマリダさん。これ、重要です。

少年が少女と会った時、刻が再び動き出す・・・

「マリダさん、僕たちは戦っちゃいけないんだよ！ーそう、マリ
ーダさんも感じてるでしょ！？」

君は刻ときの中に真実の愛を見る・・・

以上です。ご希望があれば教えていただきたいと思います。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3873r/>

IS インフィニット・ストラトス～蒼空を駆ける者達～

2011年10月8日13時00分発行